



# Fate/Extra

フェイト / アホクリバ

The original is the "Original Game of Illusion, Success and Failure" version copyright © 2004

1

外典：聖杯大戦

東出祐一郎

イラスト 近衛乙嗣

# TRIAL VERSION

# プロローグ



## プロローグ

そこはどこでもない場所であり、どこでもない世界だった。

時間という概念から解き放たれたそこには朝も夜もなく、太陽も月もなく、ただ薄い極光<sup>オーロラ</sup>だけが空を光らせている。

この世界に変化はない。広がる海は波を知らず、空は雲の流れを知らない。そんな世界に住まう男は、月も星も見えぬことを少しだけ淋しく思っている。

だから、男は瞼を閉じる。閉じれば、目に映るのはいと懐かしき想い出の数々。幾千回、幾万回と繰り返してもなお飽きぬ、誇り高き過去だ。

男はいつものように首を右に向け、左に向け、地に向け、宙に向け、異常がないことを確認してから瞼を閉じる。そうして、過去という名の幻想<sup>ユメ</sup>を見ようとする。

男の名誉のために言っておくならば。

彼はもう、本当にそれしかすることがなかったのだ。戦うことも、癒すことも、悲しむことも、怒ることも、今の彼には不要な行為でしかない。

退屈か、と問われれば首肯するしかない。  
辛い<sup>ツライ</sup>か、と問われれば否定するだろう。

男はいつものように、瞼の裏に過去の情景をありありと映し出す。彼の過去はちっぽけだから、いつでも情景は明瞭だ。薄れるということはなく、穢れるということもなく、忘れ去るなど有り得ない。

「起きてください」

……繰り返し返すが、この世界に変化はない。風さえ吹かぬ、波も起きぬ、ただの固定された場所ではない。

だからもし、この世界に変化が起きたとするならば——それは間違いなく外部からの干渉だろう。

男は瞼を開く。信じ難いものを見てしまい、硬直する。ここまで感情が揺さぶられることなど、果たしていつ以来だろうか。

「久しいですね」

目の前で「彼女」が微笑んだ。脳が痺れるような感覚に、男は言葉が出るはずもない口を開く。

春の柔らかな陽光の如き髪を持つ、可憐な少女がそこにいた。

男は少女のことをよく知っている。瞼を閉じる度、目の前に現れ出た少女である。見間違えるはずもない。だがしかし、何故ここにいるのだろうか？ 貴女<sup>あなた</sup>は——ここにいては、いけないのに。

少女は悲しげに眉をひそめ、そっと男の頬に手をあてがった。

指先のくすぐるような感触に、男は幸福の息を漏らす。

「こんなに傷だらけで、こんな世界にたった一人でいるなんて」

自分のせいだ、と悲しげに少女は呟く。それは違う、と男は告げる。

——別に君が気にするようなことではない。ここは我が誇りの領域。永遠も永劫も、退屈も絶望も恐れはしない。

「もう、決して貴方<sup>あなた</sup>を一人にしません」

——ああ、それでも。君の言葉、君がここにいること、それが嬉しい。ただ、ただひたすら嬉しい。

変わらぬ完璧な世界であり、時間は凍りついていたはずだった。

だが、ここにはもう少女がいる。ならばこの世界は既に完璧ではなく、凡俗の……ありきたりの世界に堕<sup>だ</sup>したのだろう。

それが、男にはたまらなく嬉しかった。

世界は変わる。  
時間は進み出す。

SSS

ここは、掛け値無しの戦場だった。

戦闘用ホムンクルスたちが巨大な斧<sup>ハルバード</sup>を振るう。精密な魔術式を構築し、周囲一帯に膨大な破壊をもたらしていく。自然生殖で産み出されていないホムンクルスにつきものの、肉体的な欠陥を補強した結果、彼らの命は保<sup>も</sup>って二ヶ月という極めて短いものになった。

だが、この戦争で消費される命である以上、二ヶ月が二週間であっても変わりはない。錬金術によって製造されたホムンクルスは、誕生した時点で成体として確立している。

彼らは戦うために産み出され、破壊するために産み出され、そして死ぬために産み出された人造の生物だ。

一方、カバラの術式で構築されたゴーレムは主の命令を実行する従<sup>ドール</sup>僕<sup>サーヴァント</sup>人形だ。ホムンクルスはまだしも人間に近い形なのと比較して、彼らは石や青銅で造られた、人間とは程遠い存在である。

彼らは数こそ少ないもののあらゆる攻撃をもともせず、その巨軀でもって敵を踏み潰

し、石拳で殴り潰す。

ホームクルスもゴーレムも、凡庸な魔術師など問題にならぬ戦闘力を持ち合わせている。だがしかし、どちらも量という点で圧倒的に相手方に劣っていた。

竜牙兵は竜の歯を用いて産み出される骸骨兵だ。大地に歯を蒔けば、竜種の魔力と大地から獲得した知識で以て安価な雑兵となる。戦闘用に鑄造されたホームクルスやゴーレムを相手にするには、あまりに力不足だ。だが、とにかく数が多かった。

「赤」のサーヴァントによって手慰みに産み出された竜牙兵たちは、無限とも思える数を投入され、後から後から雲霞の如く湧き出ていた。彼らは、完全に砕け散るまで止まることはない。手にした鋼鉄より頑丈で鋭利な骨剣と骨斧を手に、ゴーレムに群がって打ち砕き、ホームクルスたちを斬り刻んだ。

凄惨の一言に尽きる。ゴーレム、竜牙兵、そしてホームクルス。単純な思考回路か、希薄な感情しか持ち合わせていない彼らは、自分が死ぬまで攻撃を繰り返し、相手が存在し続ける間は攻撃の手を休めることがない。

炎が奔り、土が砲弾となる。負傷した兵たちは治癒魔術によって直ちに修復され、即座に戦場へと舞い戻る。

戦うがいい、そして壊れるがいい。この戦争の意義は、消費。彼らはただの駒、統計に過ぎない。……そう、この戦争の趨勢を決めるのは決して彼らではない。

戦場のそこかしこで、時折巻き起こる巨大な爆発。群がる兵たちを、武器の一振りで薙ぎ倒し、破砕する比類無き一騎当千の強者たち。

彼らこそ、この戦争の勝敗を決める究極の駒。強靱にして俊敏、閃光のように光り輝く英雄の化身である。

突如空気が強烈な震動を帯びて、周囲にいた竜牙兵やゴーレムたちを薙ぎ倒した。バラバラに、欠片欠片に、何もかもを塵芥へと変えていく。

戦場に奇妙な空白地帯が出来上がる。だが、そこに踏み込む者は誰もいない。ホームクルスも、ゴーレムも、脳無しの竜牙兵ですら理解していたのだ。そこは戦場における蟻地獄。近付けば、何の意味もなく砕け散るだろうと。

存在する権利を持つのは、選ばれし者のみ。

——そして今、そこに二人の剣士が立っている。

片や矮軀ながら、鋼の塊のように重厚な全身鎧に身を包んだ白銀の剣士。顔を覆う兜のせいで、人種も性別も一切不明。武器は、華麗な装飾を持つ白銀の剣。

片や尋常ならざる雰囲気纏う、長身の青年。両手に握る大剣は相手方の剣同様、人ならざる者の手を介したときか思えない華麗さと重厚さを誇っていた。中でも目立つのは、柄に埋め込まれた青い宝玉である。

剣の色はそれぞれ白銀と黄金、その形と質こそ異なれど両者の剣はまさに英雄が手にす

るに相応しい輝きを誇っていた。だが、この戦いはありえない。剣の時代は遙か昔に終わりを告げている、戦場を席捲するのは本来、火器であるべきはずだ。

では、彼らは銃を持った人間に嘲弄されるべき存在、時代遅れの蛮人なのだろうか？否、それこそありえない。

「——行くぞ、黒のセイバーよ」

白銀の側の呼び掛けに、黄金の側が応じた。

「——来い。赤のセイバー」

次の瞬間、獅子が如き咆吼と共に、赤のセイバーが跳んだ。その踏み込みは大地を揺るがし、突撃速度は音速の壁を突き破る。この跳躍は、赤のセイバーが保有する『魔力放出』と呼ばれるスキルの賜物である。武器や自身の肉体に帯びた魔力を瞬間的に放出することで、剣士は銃弾にも似た勢いで突貫し、矮軀に似合わぬ得物を軽々と振るうのだ。跳躍の余波で、大地に転がっていたゴーレムや竜牙兵の残骸が次々に吹き飛んでいく。この速度、この破壊力であれば、たとえ現代の戦争における最強の陸戦兵器、主力戦車とて粉碎しよう。

——だが、跳躍する剣士が尋常ならざる者ならば、相手取る方もまた魔人の域に達した

存在である。

巨竜の如く猛々しい雄叫びと共に、黄金の大剣を手にした、黒のセイバーが数歩を踏み込んだ。凄まじい速度で突貫する敵を前にして些かの逡巡もなく、掲げた大剣を振り下ろす。

特攻する白銀が銃弾ならば、迎撃する黄金は高速のギロチンだ。鋼が激突し、その余波で周囲の空間に馬鹿馬鹿しいまでの破壊をもたらしていく。

「ハッ。なまっちよろい斬撃だぞ、黒のセイバー……！」

「く、っ——!!」

鋼鉄と闘魂が激突し、火花を散らす。そこに同情はなく、憎悪もなく、あるのはただ互いの存在を拒絶するという強い意志と、強者と戦う歓喜の渦。既に十合、剣を交えた。この戦争始まって以来の数に、赤のセイバーは無意識に頬肉を釣り上げて笑う。

二人は本来この世に存在するものではない。彼らは歴史に名を残し、伝説を打ち立てた偉大なる超人たちの現身。死が訪れても名が消えることなく、ただ人々の胸にあり続ける英雄たちを『英霊』と呼称するが、二人はその分身——使役される者として現界したサーヴァントである。

十三合目の激突——次の瞬間、世界が静止した。互いの武器は碎け散ることなく、互いの肉体は吹き飛ぶことなく、芸術的なまでの均衡を見せた二騎は、そのまま鏖迫り合いへ

と移行した。一見したところ、体格という点では明らかに「黒」のセイバーが有利だった。

「赤」のセイバーと比べれば、その差は大人と子供に等しい。

だが、圧おされているのは他ならぬ黄金の剣士であり——圧しているのは、白銀の剣士である。

理由は先ほどと同じ、スキル『魔力放出』。今度は突進ではなく、自身の筋力を増強する方に魔力を回している。今の「赤」のセイバーは、起爆薬を発火させて飛び出す寸前の弾丸の如しだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

踏み込む足が大地に沈み、気合を轟かせるは白銀の側——「赤」のセイバー。

たまらぬとばかりに「黒」のセイバーは吹き飛ばされたが、そこはやはり英雄だ。無様に転がることなく後方へ跳躍する。膝も突かず、表情一つとて変えない。

「赤」のセイバーが、剣を真っ直ぐ突きつけた。微かな含み笑いには、面を取らずとも分かるほどに嘲笑の色が滲み出ている。

「それでも、最優を誇るべきセイバーのクラスなのか？ 失望したぞ。もっとも、紛まがい物ならば、この程度が限界か？」

「……」

「黒」のセイバーは沈黙する。確かに「赤」のセイバーの言う通り、自身は紛い物の英霊。

真正の英霊たる、「赤」のセイバーに敵う道理はない。

しかし、だからといって退く訳にはいかなかった。自分の背後に倒れ伏した友を救うためには……否が応でも、戦わなくてはならないのだ。

「——剣よ」

眼前の敵を打倒するため、「黒」のセイバーは最良の手段を選んだ。

「満ちろ」

淡々と。迫り来る死への恐怖にも表情一つ変えずに「黒」のセイバーは告げる。頭上に掲げた大剣から、橙色の光が満ち溢れ始めた。

「宝具を解放するか。……ハ、いいだろう！」

「赤」のセイバーは唸るように呟いた。その声色に、焦りは微塵もない。宝具——真名しんめいを詠唱することで発動する、サーヴァントにとつての必殺兵装アルテマウェポン。

シンプルに凄まじい破壊力を持つもの、放てば必ず相手を貫き殺す特性を持つもの、武器ではないが投擲武器とうてきに対して特性を持つ最硬の盾。伝説の分だけ、宝具は存在する。

そして、「黒」のセイバー同様「赤」のセイバーも、当然宝具は所有している。

「——では、マスターの許可も下りたことだ。こちらにも宝具で対抗させてもらおうか！」

「赤」のセイバーが白銀の剣を構えた。それと同時に、顔を覆っていた重厚な兜が、二つに割れて鎧と一体化した。



互いの視線が交錯する。「黒」のセイバーはわずかに驚きを表すように、眉を少しだけ釣り上げた。何とも驚くべきことに、「赤」のセイバーは少女の顔をしていた。通常、サーヴァントは全盛期の姿をもって召喚される。故に、大抵の英雄は脂が乗った二十代から三十代の姿だ。しかし、「赤」のセイバーは明らかに若すぎる。恐らく、二十を超えてはいまい。

もつとも。見目麗しい少女の貌をしてはいても、その凶悪性は隠せない……というより、元より隠そうともしていないようだ。「黒」のセイバーを睨み据えるその瞳の奥には、闘争への愉悅と残忍さが入り交じっていた。

「……何故、兜を？」

「黒」のセイバーの問い掛けに、「赤」は鬱陶しそうな声で応じた。

「何、この兜を脱がなければオレは宝具を発動できないだけさ。些事に囚われる余裕があるのか、「黒」よ？」

瞬間、剣を構えた「赤」のセイバーを中心とする一帯が血に染まる。そればかりではなく「赤」のセイバーが持つ剣の刀身が血の極光に包まれ、奇怪な音を立てて変化していく。

これはもちろん、本来の宝具の姿ではない。その有り余るほどの憎悪によって、清廉にして華麗だった名剣は、魔人が手にするべき禍々しい邪剣へと変貌していく。

「仕置きの時間だ。紛い物に相応しい最後を遂げるがいい。「黒」のセイバー——！」

「赤」のセイバーがその異形の剣を振り上げる。

誰の目から見ても明瞭な、その必殺の一撃を——。

「……参る」

「黒」のセイバーは、先ほど同様に躊躇いなく正面から立ち向かおうとする。勝ち目がある、勝ち目がない、それは彼にとつてどうでもいいことだ。

——これは、為さねばならぬこと。  
「黒」のセイバーはそう理解している。彼は命を懸けるのではなく、懸けるべき命が、そもそもないのだから。

橙の光と、血の極光が一瞬で膨れ上がった。渦巻く大気は絶叫し、二つの宝具が完全解放されたことを周囲に知らしめる。

これこそがかの伝説の剣。戦場を駆け抜けた英雄が手にした、敵を殺し魔性を穿つ幻想なのだど咆吼する。

彼らが手にしたのは共に剣、彼らのクラスは共にサーヴァント・セイバー、そして——  
互いを、打倒すべき敵とする。

「我が麗しき——」

「赤」のセイバーが猛る。

「幻想大剣」――

“黒”のセイバーが吼える。

「――父への叛逆ッ!!」

「――天魔失墜ッ!!」

黄昏の光と、赤い稲妻が疾走し激突する。純粹破壊のみを目的とする怒濤の如き閃光が二つ、互いを喰らい尽くそうとする。

これは、人類の紡いだ歴史の中で有り得なかった光景だ。異なる時代に生まれ、異なる大地で活躍したはずの英雄二人の、必殺の宝具が衝突する。

光が満ち、周囲一帯あらゆるものを殲滅する。取り囲んでいたゴーレムや竜牙兵が巻き込まれ、塵と消えた。

この莊嚴にして苛烈なる光景を目撃していた者たちは、その悉くが息を呑んだ。赤と橙に満ちたその空間は、さながら世界の終焉を告げるよう。

だが、物事には必ず終わりがある。膨れ上がるだけだった光は徐々に和らぎ、塵のように消え去っていく。

二人がいた大地は見るも無惨な有様となっていた。

翅を広げた蝶を想像して欲しい。それと似たような跡が地上に刻まれている様を。それは高々度の上空からでも視認できるほどに巨大な、爆発の痕跡だ。

では、その爆発跡が斬撃によるものだと思える人間は、果たして何人いるだろう？この日、確かに新たな神話が地上で産み出された。

伝説の聖剣と、稀代の邪剣による有り得ない激突が、この大地を抉り出したのだ。

二人の勝敗を分けたのは彼らの技でも力でもなく、宝具の優劣でもない。“黒”のセイバーが放った宝具は、彼を中心とした半円状に拡散する黄昏の波を放つもの。

一方、“赤”のセイバーは彼女が持つ剣の切っ先から直線状に赤雷を放つもの。二者の宝具の特性と、互いが取った間合いが勝負をつけた。もし、“黒”のセイバーが数メートルでも接近していれば、勝敗の行方は傾いていたかもしれない。

ともあれ、勝敗は決した。倒れ伏したサーヴァントが一人。膝を突くサーヴァントが一人。膝を突いていた“赤”のセイバーは、恥辱に震えながら立ち上がった。

絶殺の意志を籠めて、彼女は倒れた“黒”を睨み据える。

「貴様、何故生きている……!!」

宝具は必殺の武器であると同時に、絶大なる誇りそのものでもある。真名を解放した以上、必ず殺していなければ名誉に関わる。そして“赤”のセイバーにとって騎士王の名を冠した宝具は、誇りを超えて最早ある種の怨念と化している。

故に、「赤」のセイバーにとっては「黒」が生きただけで許し難い。その手に剣を握り締めているなら憎悪の対象。まして頭を起こして立ち上がろうとしているとあっては、その軀を百度斬り裂いても飽き足らない。

激痛がその身を苛<sup>さいな</sup>んでいるが、戦闘行動に支障はない。あれだけの宝具を使用したのであれば、凄まじい量の魔力を消費しているはずだが、彼女のマスターは極めて優秀であり、宝具を使用した後でも即座に動ける程度の地力はある。

「そこを動くな」「黒」のセイバー。オレが殺す、他でもないこのオレが、お前を殺してやる……！」

彼の首を刎ね、その心臓に剣を突き立ててやる。それは、己だけに許された権利だ。

「赤」のセイバーは、その一步を踏み出した。

——ともあれ、『俺』は生きていた。生きていただけ、とも言えるが。

心臓は変わらず、強い律動<sup>リズム</sup>を奏でている。体内の魔術回路が励起し、必死になってセイバーであろうとする。だが、蓄積していた魔力は、先ほどの一撃で残らず四散した。セイバーであり続けるためには、最早何もかもが足りなかった。

全身を覆っていた鎧<sup>よろい</sup>が、解<sup>は</sup>れるように消えていく。併せて、セイバーの象徴<sup>シンボル</sup>であるとも

言える黄金の大剣も宙へ溶けていった。

この瞬間、「黒」のセイバーは世界から消失した。

途端、圧倒量の苦痛にセイバーだった自分の意識が飛びかかる。血反吐<sup>ちへんど</sup>を吐き、神経を切断される痛み、肉が引き裂かれる圧力、骨が砕け散る衝撃に涙を零<sup>こぼ</sup>す。悲鳴を必死になつて堪え、それでも耐え切れずに呻き声を上げた。

……しばらくして苦痛は和らぎ始めたが、最早剣を振るうこともできない。そもそも、セイバーとしての力を失ってしまった俺にとって、現状を打破することなど不可能だ。令呪はまだ二画残っている……だが、声が出ない。勇気がないという訳ではなく、物理的な痛みが本能に警鐘を打ち鳴らしている。変身するには、一定以上のインターバルが必要だ。続けざまの変身にはこの肉体が耐えきれず、崩壊する。

殺意を滾<sup>もよほ</sup>らせた「赤」のセイバーが、近付いてくる。最早、為す術<sup>すべ</sup>などない。奇跡は起きなかった。否、奇跡を受けてすら自分はここまでが限界だったのだろう。

悔しいが、その事実を受け入れるしかない。

……死への恐怖は、あまりない。自身の場合は、単なる消失に等しい。未練も後悔も、大したものはない。あるとすれば、守ろうとした者を守れなかったことくらいだ。

それにしたところで、大した悔いではない。望まれた訳ではなく、助けを求められた訳でもない。ただ、生まれて初めて自分で考え

## 第一章

て自分で選んだ目的だったから。大切にしようと、そう考えただけである。

結果に後悔はない。後は死を待っただけ。迫り来る死の前に、時間が溶けた飴のように引き延ばされていく。早くして欲しい、と無意識に願ってしまう。時間が緩慢であればあるほど、俺は禁忌である問い掛けを思考してしまうから。

——ああ。俺は一体、何のために生きていたのだろう。

答えはない。むしろ、あつて欲しくない。消費、されるために産み出されたなどという答えを、決して受け入れたくはなかった。

そう、ここで無為に死ぬが己の定命<sup>じようめい</sup>。やるべきことも、目的も、全てない。

「——あの一撃で仕留められなかったのが、オレにとつては屈辱極まりない。だからといって、見逃す気にもならなくてな」

冷徹なる戦士としての眼で、“赤”のセイバーは俺を睨め付けた。彼女の持つ剣が、自分の首筋を狙っているのが、素人である俺にもよく理解できる。

「では、死ぬ。“黒”のセイバーよ」

言葉は淡々と。振るわれる刃は迅速に。そうして、己の視界が白に染まっていく——。

## 第一章

薄暗く何も無いその部屋は距離感が奇妙なまでに歪<sup>ゆが</sup>んでいた。信じ難いほどに広大にも見えたし、圧迫されるほど狭くも思える。中央に立てられた蠟燭は、ぼんやりと部屋にいる男たちの顔を照らし出していて、明瞭なものは一つもない。境界線がどこか曖昧なその部屋の空気は、言い難い苦悶に満ちていた。

「――戻ったのは一人、か」

場集ったのは三人。一人は老人、矮軀であるが背は真っ直ぐ伸ばされ、顔の皺は木彫りの美術品のような光沢があった。召喚科学部長ロッコ・ベルフェバン、学部長に就任してから既に在任五十年を超えたと言われているが定かではない。

噓<sup>うわ</sup>れた声で呟かれた老人の一言に、一人の青年が頷いた。

「あの戦闘を拝見させて戴きました。……おぞましい光景です、あれは許されざる存在だ」  
眉目秀麗な、赤毛の青年であった。強く、気高い意志を持つような眼差しや気品ある顔立ちから、上流階級の存在であることは一目で見て取れた。そして、その言葉には強い使

命感のようなものが表れていた。

男の名はブラム・ヌアザレ・ソフィアリ。降霊科学部長の後継者であり、時計塔で一級講師を務めている。

老人は同意するように頷き、沈黙を守る最後の一人に目線を送った。その男は無造作に長い髪を伸ばし、不機嫌そうに眉間に皺を寄せている。

「お主はどう考える？ ロード・エルメロイよ」

指に挟んだ葉巻に蠟燭の炎で火をつけて、エルメロイと呼ばれた男はゆるゆるとした仕草で首を横に振った。

「Ⅱ世だ。私を尊重したがるご老体の下心はありがたいが、Ⅱ世をつけてくれ。そうでなければエルメロイの名など痒くてとても耐えられない」

「失礼。エルメロイⅡ世、如何とする？」

「……ま、方針は変更せねばならんでしょ。何しろ、我々は四十九人の魔術師を失った。一人生き残りましたが、ありや当分使い物にならんでしょ」

五十人の魔術師を編制し、綿密に作戦を立てた。作戦開始時点では、あらゆる意味で完璧に状況が推移していた。だが、たった一騎の使い魔に全てを狂わされた。

結果四十九人が死亡し、最後の一人がどうか一矢報いた。

「彼のお陰で、我々にも反撃のチャンスが巡ってきた訳だ。七人のマスターを揃えれば、

「こちらにも勝機は見えてくる」

「じゃが、誰が行く？ 生半可な魔術師では返り討ちに遭うだろう。トゥリファスは彼らの管理地だ」

しばしの沈黙の後、エルメロイⅡ世が明白な真実を淡々とした口調で告げた。

「外部の魔術師を雇うべきでしょうね。この聖杯戦争は、これまで我々が体験したことのない前代未聞の規模スケールです。無論、一人か二人は時計塔から供出しなければならぬでしょうが」

その言葉に二人は賛意を示した。今から彼らは、七人のマスターを選出せねばならない。だが、事態は切迫している。もしも、これが時計塔の名門から選ぶとなれば一大事だ。魔術刻印の継承、保管、その他様々な要因で選定まで三ヶ月以上は掛かるだろう。ならば、気軽に雇い入れることが可能なフリーランスの方が遥かに効率が良い。

「ならばワシとエルメロイⅡ世とで『これは』と睨んだ者を集めよう。残り一人は聖堂教会から出させるか。我々の正当性を知らしめるために、連中には是が非でも参戦して貰わねばなるまい」

「では、聖遺物の選定は私が引き受けます。急を要しますが、何とか戦力として拮抗できる程度の触媒を集めてみせましょう」

ブラムの言葉に、ベルフェバンは床にステッキの石突きを叩きつけて宣言する。

「これは今日世界中で執り行われている聖杯戦争の紛い物とはあらゆる点で事情が異なっている。規模のみを考慮すれば、かつて冬木で三度行われた聖杯戦争を上回るだろう。どうか御二方とも、気を引き締められるように。我々時計塔の顔に泥を塗ったことを、存分に後悔させてくれよう」

目線を交わすこともなく、三人は別々の方向へと歩き出した。

## SSS

ナチスドイツのポーランド侵攻により、第二次世界大戦が開戦する前夜。日本の冬木市において三度目の聖杯戦争が執り行われた。七騎のサーヴァント、七人のマスターは己が願望のために最後の一騎になるまで殺し合おうとしたが、戦争途中に小聖杯が砕け散るというアクシデントが発生。聖杯戦争そのものは、その時点で有耶無耶に終結した。

問題は、この後である。

円蔵山の洞窟に秘匿されていた、万能願望機たる大聖杯。どこでどう運命が変転したのか、ナチスドイツに加担していたある魔術師がそれを発見し、軍の力を借りて移送しよう

と試みたのだ。

アインツベルン、遠坂、マキリの御三家及び帝国陸軍はその企みを防ぐべく奮戦したものの、聖杯戦争直後ということで弱り切っていた彼らは敗北。御三家が総力を結集して構築した大聖杯は、ナチスドイツに強奪された。

その戦いは文献に載らず、映像に残らず、人々の記憶にすら存在しないものであったが。軍と魔術師の凄絶な戦争であったことだけは、疑いようのない事実だ。

さて、大聖杯を手に入れたナチスドイツは、世界を思うがままに統べることができたのだろうか？

……無論、そんな未来は訪れなかった。ドイツまで輸送する途中、大聖杯は謎の消失を遂げた。帝国陸軍によって強奪されたのか、あるいはソ連軍の襲撃でもあったのか。

いずれにせよ、ドイツ第三帝国の象徴となり、世界統一の夢を叶えるはずだった大聖杯は、誰の手にも渡ることなく消えたのだ。

責任者は更迭され、関係者は戦場に送られ、勝利者であるはずのナチスドイツにも、大聖杯の行方を知る者はいなくなり——そもそも、大聖杯そのものを知る人間もいなくなった。ナチスドイツに所属していた『ユグドミレニア』と名乗る魔術師もまた行方知れずとなった。

大聖杯は消えた。御三家の夢、あるいは妄執は露と消え去り、冬木市は平穏のままに終

戦を迎える。

そして、幼子が老人になる程度の年月が過ぎ去り――。

イギリス。いわゆる魔術協会の総本山たる『時計塔』。ロンドンの大英博物館を拠点とするここには、我こそは永きにわたる魔術の歴史に覇を唱えし者と、野望に満ちた魔術師たちが世界中から集う。

千人の内、千人が道半ばで挫折することは確実であるのだが……まあ、夢を視るのは自由であるべきだろう。

少なくとも、元学生として獅子劫界離ししきうかいりはそう思っている。肩に軽い衝撃。考え事をしていたせいか生徒とぶつかってしまったらしい。謝ろう、と思ったときにはその生徒は顔を引き攣つらせながら全力で自分から逃げ出していた。

嘆息。いつものことではあるのだが。

魔術師は扱う薬物のせいか、あるいは扱う魔術のせいか、時に異形と呼ぶべき姿になることもままある。それは決して恥ではなく、むしろ誇るべきものであつて卑下するようなものではない、というのが魔術師における常識だ。

——にもかかわらず。自分の扱いはやや不遇ではないかと獅子劫は思うのだ。

普通に歩道を歩いているだけで、警官から身体検査をされること三回（いずれも暗示を掛けることで逃れた）。時計塔に到着すると、警備を担当している魔術師に詰問されること四回、廊下ですれ違う生徒が怯えきった瞳で自分を見ること数え切れず。

人種偏見だ、差別だと訴えてやりたいところだが、彼らは決まてこう言うのだ。

「そうじゃなくて、お前が怖いのだ」

と。非道ひどい話もあつたものだ。確かに、多少強面こわもてであることは認めよう。自身の服装が普通の魔術師のそれとは些か異なることも認めよう。けれど、自分はいつでも笑顔顔を忘れたかっと思ふのだが――。

そう考える獅子劫界離は、自身の恐ろしさをあまり理解していない。顔スカイフェイスの疵痕、剃刀かみそりのような目つき、筋骨隆々な肉体、魔獣から剥いだ皮を縫って創り出した黒いジャケツト。おまけにフリーランスの賞金稼ぎとして戦場を駆け抜けたが故に、血と火薬の濃厚な臭いを全身に漂わせているとあつては、いかに真つ当な倫理観を持ち合わせない魔術師といえども恐ろしいものは恐ろしい。

「お主が笑うと、確かに恐ろしいな」

甲高くヒョヒョヒョと笑いながら、老人は不服そうな獅子劫を有なめていている。時計塔、召喚科学部長ロッコ・ベルフェバンの私室である。

部屋の壁に設置された陳列棚には、猿と象を合体させたような獣の頭蓋骨があり、その



隣には明らかに千年以上前の巻物スクロールが嚴重に保管されるでもなく、無造作に置かれている。その上にあるやたらと重たげなガラス瓶には、頭が九つに分かれた小さな蛇がホルマリン漬けにされていた。

「相変わらず何でも有りだな、ここは」

ホルマリン漬けの蛇は自分の鑑定眼が確かならば、恐らくこの世界に二つとない代物だ。そんなことを考えつつ、獅子劫は応接用のソファに体を沈ませた。

「何。珍しいだけで、在ると分かっている代物だよ。貴重ではあるがな」

「ヒュドラの幼体、そのホルマリン漬けなんて、貴重とかそういうレベルなのか？」

「あれは偽物だよ」

くつくつと、馬鹿にしたようにベルフェバンが含み笑う。獅子劫はそれを一瞥しただけで、特に口論を仕掛ける素振りも見せず、無言で菓湯すずを啜った。噎むせ返るほどに辛いからが、疲労回復効果があるので甘んじて受け入れる。

「さて、呼び出したのは他でもない。お主、『冬木の』聖杯戦争を知っているか」

獅子劫はわずかに顔をしかめた。

「そりゃまあ、知っているが」

聖杯戦争とは万能の願いを叶えると言われる聖杯を巡る戦いのことだが、『冬木の』という枕詞まくらことばがついた場合、魔術師の間では英霊をサーヴァントとして召喚し、最後の一騎に

なるまで殺し合う極めて特殊な戦争を指す。

東方の小国として協会の監視が緩かったせいだろう、この聖杯戦争は三度繰り返されるまでは目をつけられることはなかった。極東の片田舎に万能の願望機が顕現するなど、冗談にも程があるというものだ——魔術協会の認識は、その程度でしかなかった。

だがしかし、三度目の聖杯戦争が全てを歪ませた。第二次世界大戦直前というせいもあったのだろうが、国家が介入するという異常事態を機に、冬木における聖杯戦争は終焉を迎えた。同時にこの聖杯戦争のシステムそのものが世界中の魔術師たちに情報として拡散した。

それほどまでに、アインツベルン、遠坂、マキリの御三家が構築した聖杯戦争のシステムは儀式として優れていたのだ。

歴史に『もしも』があったとするならば、つまり、第三次聖杯戦争がここまで拡大しなければ、聖杯戦争は未だ冬木市のみの独自儀式だったろう。恐らくは今より十年ほど前に、第四次聖杯戦争が執り行われたはずである。だが大聖杯を失った冬木では、最早聖杯戦争は起こらない。

現在、亜種の聖杯戦争は世界各地で繰り広げられている。もっとも、そのほとんどは小規模で、召喚する英霊も多くて五体、儀式を成立させたとしても万能の願望を叶えるまでには至ってはいない。

「では、冬木の聖杯戦争。その真の目的は知っているかね？」

「……そっちは知らねえ」

ベルフェバンがニタリと、厭らしい笑みを向けた。獅子劫は顔をしかめ、続きを促す。

「——『根源の渦』に至る、孔を穿つためだ」

「何だど？」

獅子劫は予想外の答えに啞然とした。ベルフェバンが言うには、あの儀式で真に必要なのはマスターではなく、サーヴァント。即ち、英霊の魂だという。

小聖杯でその魂が座へ還ることを一時的に防ぎ、七騎の英霊が持つ強大な魂によって根源の道を開く。それこそが『冬木の』聖杯戦争の真の目的であった。

「つまり、あちこちでやってる亜種の聖杯戦争はありゃアレか。違うのか」  
うむ、とベルフェバンが頷いた。

「根本の部分でズレておる。表向きの目的である『全ての願いを叶える』部分のみを模倣した紛い物ということだな」

遍く全ての願いを叶える、それは単なる誘蛾灯に過ぎない。サーヴァント同士の殺し合いですら、実のところまるで意味がない。ただ、形式としてあまりに優れているためにこの部分は秘匿された。もつとも、真の目的を知る御三家ですら公平に参加しなければならなかったのは皮肉だが。

獅子劫は確かに驚いた。驚いたが——一体、それが何だというのだろう。なるほど『冬木の』聖杯戦争の真意はそれだったのかもしれない。だが、真の聖杯戦争を知る者はもういない。大聖杯を奪われた御三家は四度目の聖杯戦争は執り行っていないのだ。

獅子劫は間違はなく一流の魔術師ではあるが、『冬木の』聖杯戦争を再現することは不可能だ。この魔術協会本部である時計塔の講師といえども、果たしてあのシステムを完全に模倣できる者が何人いることか。

つまり、貴重な知識ではあるが情報としては何の価値もない。

「……それで、爺さん。俺に何をしろってんだ？」

まあまあ、とベルフェバンは急かす獅子劫を制止する。

「話はこちらからだ。『冬木の』聖杯戦争における最重要基盤である大聖杯、それが第三次聖杯戦争後に消息を絶ったのは知っているな？ ……三ヶ月前、それが遂に発見された。発見された、というよりは隠されていたのが分かったと言うべきだが」

「……場所は何？」

「ルーマニア、トランシルヴァニア地方の外れにある都市トゥリファス。その都市最古の建築物であるミレニア城塞に設置されているらしい」

「それを確保してくれ、か？」

「ふむ。まあ、依頼の目的は確かに似たようなものだが——。その前に、一つ厄介事がある」

ってな。その情報を我々にもたらしたのは、ユグドミレニア一族の長ダーニックだ」

「……『八枚舌』のダーニック？」

「そう。その八枚舌のダーニックだ」

ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア——既に百年近く生きているらしい、ユグドミレニア一族の長だ。時計塔では最高峰の階位である『王冠』に上り詰めており、二級講師として元素転換を教えていたが、教え子たちからの評価は低かった。だが、彼の真価はむしろ講師よりも『政治』の方で発揮されていた。

時計塔での派閥抗争、権力闘争、予算獲得闘争は常のことであつたが、彼は政治屋としての抜群の手腕を発揮し、裏切り寝返りは当たり前、信じる者はもちろん、信じていない者すら操作して騙し通す——まさに一流の詐欺師だつた。

「で、ダーニックが問題なのか？」

彼のことだ、その聖杯に関する何かしらの取引に介入しているのかもしれない。が、ベルフェバンは首を横に振り、この老人にしては極めて珍しい表情を浮かべた——不快そうに顔を歪ませ、怒りを露わにしたのである。

「ダーニックが問題なのではない。ユグドミレニア一族が問題なのだ」

「どういうことだ？」

「……ミレニア城塞の主はユグドミレニア一族。そして、彼らは時計塔から離反した」

その情報は、ある意味で先ほどの『冬木の』聖杯戦争における真の目的よりも余程衝撃的だったかもしれない。おおよそ考えられる限り、有り得ない言葉だつたからだ。

魔術協会は大まかに三つの部門に分かれている。一つはアトラス院、エジプトのアトラス山脈に紀元前より存在し、錬金術を中心とする組織だ。一つは彷徨海、北欧の海上付近を『彷徨』する魔術協会における原型とでもいべき組織だ。そして、最後の一つが時計塔。魔術協会の中核にして、最大最新の研究機関である。

魔術師の中には、異端故に——あるいは、封印指定せねばならぬほどに強力であるが故に、協会から離反する者もわずかながらに存在する。離反行為そのものは、別段珍しいことではない。だが、それが一族全となると話は別だ。

「一族挙げての離反だつて？ どういうことなんだ、それ」

「お主も知っているだろう。ユグドミレニア一族は貴族ではない」

魔術師の素養は、どれだけ永い時間を魔術と共にあつたか——即ち、歴史の長さで左右される。古くから魔術を学ぶ貴族ならば、最長で二千年を超えとも言われている。

大貴族が三家、その親族にあたる一族が二十家。そして、ユグドミレニア一族はそのどちらにも属しておらず、繋がりもない。決して歴史が浅い訳ではないにもかかわらずだ。そうなのは過去権力闘争に敗北したとも、貴族三家と不和の関係にあるとも、魔術回路の質が悪く敬遠されているとも噂されているが、理由は定かではない。

ともあれ、彼らは常に魔術の名門からは弾かれてきた。だがユグドミレニア一族として、指をくわえて傍観していた訳ではない。

彼らは通常のやり方……代を重ね、魔術師としての血を濃くし、初代が選んだ魔術系統を極めるというやり方を捨てた。その代わりに、浅く、そして広く一族に連なる魔術師たちを掻き集めたのである。

対象となったのは、単純に歴史が浅く、魔術回路が貧弱な一族。あるいは衰退が始まり、代を重ねるごとに魔術回路が貧弱になりつつある一族。あるいは権力闘争に敗北し、零落するしかない一族。あるいは魔術協会からペナルティを受けた、賞金をその首に懸けられた魔術師といった類。つまり、魔術協会の中心からはぐれても尚、根源への到達を諦めきれない者たちだ。

ユグドミレニアは彼らに囁いた。血を遺したくはないか？ 研究成果を己のものだと声高らかに謳い上げたことはないか？ 一族の名を歴史に刻みたくはないか？

ユグドミレニアのミドルネームは、全てが過去そうやって吸収された一族の名である。彼らは魔術刻印すら、統一していない。かつての一族の刻印を、そのまま継承し続けている。

彼らが学ぶ魔術系統も幅広い。西洋型錬金術、黒魔術、ウィッチクラフト、占星術、カバラ、ルーン、果ては日本の陰陽道に至るまで、一族の誰かがそれを学んでいる。

とはいえ、所詮は衰退した一族や歴史の浅い一族を掻き集めた連合のようなものであ

る。貴族たちが笑って見逃すほどに、彼らの魔術はたかが知れたものだった。

平均として二流、稀に一流が出ることもあるが多くはそこ止まり。数が多くとも脅威には当たらない。無論、見逃されていたのはダーニックの政治手腕によるところも大きいが、彼らはあくまで、数が多いだけが取り柄の一族——そのはずだった。

「そのことに鬱屈していたのかは我々の与り知らぬことだが、ある日彼らは魔術協会からの離反を申し出た。今後は、自分たち一族が中心となって新たな協会を結成する、と」

呆れたわい、とベルフェバンは嘆息した。獅子劫もそれには同意する。魔術協会からの離反を明確に発言するというのは、要するに宣戦布告に等しい。手袋を投げつけ、顔に唾を吐き捨てたようなものだ。

確かにこの時計塔にいる限り、ユグドミレニア一族が貴族に加われる可能性はほぼ皆無だ。百年経とうが千年経とうが、余程の政変でもない限り格下扱いは免れまい。

しかし、それと離反は話が別だ。何か余程のものが無い限り、少なくとも一族挙げての離反など不可能だ。

……逆に言うと余程のものがあれば、離反するきっかけとしては充分かもしれない。そう、例えば——万能の願望機、根源に至る道筋を指し示してくれる大聖杯、とか。

獅子劫の表情に、ベルフェバンは結論に達したことに気付いたのか満足げに頷いた。

「そう。彼らは冬木の大聖杯を協会の象徴とするらしい。生き残った魔術師が、その伝言

を届けてくれた」

「……生き残った魔術師？」

ベルフェバンは頭を掻いて羊皮紙を取り出し、軽く指で叩いた。発動した魔術は過去の映像を再現するもの。獅子劫は写真やビデオで構わないだろうにと思うが、ベルフェバンほどの老人になるとビデオカメラのような技術すらも許せないらしい。

現れた映像は、獅子劫にとってはそこそに見慣れたものだ。明らかに拷問の形跡が残っている人間、椅子に座った彼は虚ろな表情のまま宙を見て何かぶつぶつと呟いている。

「メッセージを届けてくれた魔術師だ。これは発見当時の状態で、今は治療が成功して深い眠りに就いている。脳の洗浄が済むまで半年は掛かるじやろうな」

「コイツ、何て言ってるんだ？」

「我々ユグドミレニアは魔術協会の下賤な政治闘争から抜け出し、ここルーマニアで真の魔導の道を探究する新たな協会を組織する。我らは第七百二十六号聖杯を保有している。七騎の英霊でもってこの大聖杯が起動したとき、我らは栄光への道を一步踏み締めることになるだろう」……ということ、延々と」

第七百二十六号——それが、冬木で観測された聖杯だという。その大聖杯を起動させれば、少なくとも見積もっても数百年間は消費しきれぬほどの膨大な魔力資源が使い放題だ。もしかすると、根源に到達することも可能かもしれない。

「……一つ聞いていいか？　生き残った魔術師、と言ったな。ということは死んだ魔術師もいる訳だ」

「当然だな」

「何人死んだ？」

その問い掛けに、ベルフェバンは少し躊躇したものの正直な数を告げた。

「四十九人。五十人の『狩猟』に特化した魔術師で襲撃を仕掛けて、生きて帰還したのはたった一人だ」

「——」

嘆息は、果たしてどちらのものだったか。

狩猟に特化した、ということは即ち獅子劫の同業者ということである。無論、フリーではなく協会に属する者たちだろうが、それにしても五十人とは多すぎだ。それは即ち、当初の予定はまさしく殲滅にあったということが窺い知れる。

さもあらん、これほど大規模な離反劇だ。笑って済ませば、協会の名誉に傷がつく——何より、二千年という永い時間を踏みにじった恥辱は、彼らへの苛酷な罰がなければとてもではないが引き合うまい。罰に行ったというのであれば、五十人は適切な数だろう。だが、それでも足りなかったというのか。

「足りなかったところではない。次元が違ったわ。奴等、事もあろうにサーヴァントで迎撃いおった」

ベルフェバンの言葉は、五十人を殲滅できた理由としては実にもっともだった。  
「……なるほど、そりゃ無理だ」

五十人が百人になったところで、それでは同じことだったろう。仮にも英霊と呼ばれるまでに至った存在である。現代の魔術師など、彼らにとつては童子に等しい。

「差し向けた使い魔が全てを見ていた。そのサーヴァントは魔術師の前に突然出現し、笑いながら腕を一振りして——それで、終わりだ。次の瞬間、一人を除いて全員が長い杭に突き刺されて殺されていた」

『ルーマニア』で『杭』ねえ……」

ともあれ、サーヴァントは既に召喚されているらしい。ならば、逆に好都合ではないのだろうか。

「それで爺さん。ユグドミレニアがサーヴァントを召喚した、というのなら自分たちもマスターとして参戦すればいいんじゃないのか？」

大聖杯が起動した、というならば他の魔術師たちもマスターの資格があるはずだ。魔術師を派遣し、サーヴァントを召喚すれば対抗できる。

「遅い。既にあやつらは七人のマスターを揃えた。召喚はまだかもしれないが、派遣した

魔術師に令呪が点る可能性は零だ」

「……あいつら、身内同士で殺し合いするつもりか？」

「かもしれないな。あるいは一族の誰かを頭首とし、他のサーヴァントは直ちに自害させるのかもしれない。いずれにせよ、このままでは我々が手出しできないことに変わりはない」

「一応言っておくが。サーヴァントと戦え、つてならお断りだ」

まさか、と思いつつも念のために獅子劫はそう宣言した。戦略を練り上げ、戦術を組み立て、幸運と奇跡をこごとく掴んだとしても、サーヴァント一騎を倒すというだけで分の悪いギャンブルだ。ましてそれが七騎となれば、奇跡に等しい。それこそ——聖杯にサーヴァントを殺してくれ、とても頼まなければ。

ベルフェバンはにんまりと、厭らしい笑みを向けた。

「そうは言わん。ワシの依頼はな、お主にサーヴァントを召喚して戦って欲しいということだ」

「……はあ？」

異なる事を言う、と獅子劫は思った。『冬木の』聖杯戦争のシステムを使うならば、サーヴァントは最大で七騎、そしてマスターが七人のはずだ。

「そこが今回の聖杯戦争の興味深いところだな。召喚可能なサーヴァントは、何と倍の十四騎だ」

「何……？」

「最後に生き残った魔術師、彼はミレニア城塞の地下に眠る大聖杯を発見した。そして、予備システムの開放に成功したのさ」

「予備システム……」

「大聖杯は状況に応じて、令呪の再配付など聖杯戦争に関する補助を行う。可能性としてはほぼ零に等しいが、七騎のサーヴァントが一勢力に統一されたときは対抗策の為に予備システムが起動するよう仕掛けられている」

「……七騎のサーヴァントと対抗するに、もう七騎のサーヴァントが召喚可能になる、ということか」

計十四騎。その数の意味するところは、獅子劫にも理解できる。

「その通り。元よりトゥリファスと言えは、ルーマニア屈指の霊脈を持つ土地。恐らく、冬木を上回る速度で魔力を貯蔵し続けたのだろう。十四騎のサーヴァントが召喚されてもお、涸れ果てぬ魔力を持つほどには」

それは冬木においては、まさに緊急の措置だろう。下手をすれば、霊脈そのものが涸れ果てる可能性もあったのだ。

「つまり。ユグドミレニアは七人のマスターとサーヴァントを揃えた。そして——」

「そう。我々も七人のマスターとサーヴァントを揃えるのだ。そしてユグドミレニアと戦

い、勝利する」

「こちらが勝った場合、大聖杯はどうなる？」

「無論、勝利した後に我々が確保する。根源に容易く辿り着けるものを目の前にして、生き残った魔術師が冷静でいられるかどうかは分からんがね」

……なるほど。つまり「ユグドミレニアを殲滅した後は何が起きようが自己責任」という訳か。願いを叶えるもよし、願いを阻むもよし、あるいは——全てを破壊するもよし。無論、眼前の狸爺がそれに手を打っていないはずはない。戦争が終了した瞬間、直ちに回収部隊を動かす仕掛けくらいはあるだろう。

しかし、しかしだ。それを上手く出し抜けば——己の願いが成就する機会が必ず有る。獅子劫は背筋に高揚の震えが疾走<sup>はし</sup>った。その高揚をしっかりと観察していたのか、老人は我が意を得たりとばかりに頷いた。

「依頼を受けるか？」

だが、即答するのは避けた。さすがに、二つ返事で引き受けるという足下は見られる。

「幾つか質問がある。受けるかどうかはその後で」

「構わんよ」

「一つ。こちら側のマスターについて」

「ああ、残りの六人は既に決まって現地に派遣済みだ。『銀蜥蜴』<sup>シルベリヤード</sup> ロットウエル・ベルジ

ンスキー、『疾風車輪』ジーン・ラム、『結合した双子』<sup>ガムブラザーズ</sup>ペンテル兄弟、それから時計塔の  
一級講師であるフィンド・ヴォル・センベルン。我々が派遣したのはこの五人だ」

獅子劫もその人選には納得した。いずれもこの世界では名の通った魔術師、情け容赦なく敵を排除する戦闘に特化した怪物たちだ。センベルン以外とは、一緒に仕事をこなした経験もある。共闘する分には、何の問題もなさそうだ。

「残る一人は、聖堂教会から派遣されてきた監督官兼マスターだ」

「……監督官とマスターを兼ねているのか？」

「然様」<sup>さよう</sup>

聖杯戦争は、その名称故に一つの勢力を必然的に引きつけることになる。魔術協会に對抗し得る唯一無二の勢力——即ち、『聖堂教会』である。聖杯が偽物であることがほぼ間違いないとしても、その名を冠された宝具を争う魔術師たちを黙って見過ごす訳にもいかない。そこで、冬木の第三次聖杯戦争では聖堂教会の介入が行われたという。一説によれば、介入を行わせたのは他ならぬ冬木の御三家でもあったらしいのだが——真相は藪の中だ。

「……しかし、今回の戦争に監督官なんて必要なのか？」

冬木における聖杯戦争は、御三家及び外部からのマスターの公平な審判が必要だった。それ故に、どこにも与せぬ聖堂教会が選ばれたのは道理である。

だが、今回は違う。魔術協会とそれに対抗する勢力との争いであり、魔術師同士の争いを中立に審判する監督官など全くの不要だ。強いて言うならば、隠蔽工作くらいのもんだが、それなら魔術協会とてその手の人材には事欠かない。

「何。下手に教会を排除して、ユグドミレニアに肩入れされても困る。ここは一つ、我々が正統な魔術組織であることを喧伝しておかなくてはな」

ベルフェバンが告げた事情もあって、今回聖堂教会は一応の同盟勢力である魔術協会に与することにしようだ。まあ、聖堂教会側からすると、魔術協会への牽制に過ぎないだろう。

「二つ目だ。サーヴァントを召喚するには触媒となる聖遺物が必要のはずだが、それは準備してあるのか？」

ベルフェバンは頷いた。厳密に言うど、決して触媒が必要という訳ではない。触媒なしの召喚の場合は強さに関係なく、術者の精神性に類似している英霊が選択される。だが、多くのマスターはそれを避けるために、聖遺物を触媒として目的のサーヴァントを召喚しようとする。

無論、触媒があつたとしても目当てのサーヴァントを引き当てるとは限らない。例えば、ギリシャの英雄たちを乗せたアルゴ船の残骸を触媒として召喚したとしよう。古今無双の大英雄ヘラクレスが召喚されるか、船のキャプテンたるイアソンが召喚されるか、裏切



りの魔女メディアが召喚されるか、あるいは医術の神と謳われたアスクレピオスが召喚されるのか、召喚するまでは不明なのだ。だが、絞り込むことはできる。そしてそれが、この世にたった一人の英霊としか関係がない触媒——例えば、この世で最初に脱皮した蛇の皮、とある王が身につけていたマントの切れ端ならば、召喚する英霊は相性など関係なく、ほぼ一体に絞ることができよう。

触媒なしの召喚にもメリットがない訳ではない。召喚者と精神性が似通っているため、サーヴァントとの信頼関係を短期間で築きやすいという点だ。『冬木の』聖杯戦争において、マスターとサーヴァントとの相性が悪いのは致命的な爆弾を抱えるようなものだ。最後の最後で互いを信じ切れず、悲劇を招くこともある。だが、これもまた一歩間違えれば、自分と似ているが故の嫌悪や不信感が表れないとは限らない。

相性の良さは決して見逃していい事項ではないが、触媒なしで一か八かのギャンブルを仕掛けるのはデメリットが大きすぎる。

いずれにせよ、触媒があるならば問題ない。さすがに魔術協会ともなれば、大抵の英霊に縁のある聖遺物を準備できるだろう。

立ち上がったベルフェバンは机の引き出しからその黒檀こくたんのケースを取り出すと、慎重に開いた。……加工された跡のある木片だ。特筆すべきものはないのだが——。獅子劫は口を開いたとき、声が奇妙に上擦るのを感じた。その木片には、何かの熱気があった。

「これは？」

「円卓だ。かつて一騎当千の騎士たちが、この円卓で語り合った。故国であるブリテンを守るため、剣ではなく言葉で戦っていたのだ」

「ブリテンの円卓……まさか、アーサー王の!?」

獅子劫は思わず触媒を手に取りそうになって、すんでのところで自分を戒めた。

円卓の騎士……言わずと知れた、アーサー王の配下である騎士たちである。主君と配下の区別をつけないため、アーサー王が考案したという平等の円卓。

その円卓に座る騎士は、いずれも伝説に謳われた英雄たちだ。アーサー王自身はもちろんのこと、ランスロット、ガラハド、ガウェイン、トリスタン、パーシヴァル……いずれにせよ、召喚するサーヴァントとしては誰もが文句なしの知名度と強さを誇る。

「……ただ、円卓だなどの騎士が召喚されるのか分らん。恐らく、お主の精神性に即した英霊になることは間違いないだろうが」

「問題ないね。円卓の騎士であれば、誰が召喚されようがサーヴァントとしちゃ合格点だ」  
「ふむ。ということは、依頼を引き受けると考えていいのかな？」

獅子劫はしばしの思考を自身に許した。サーヴァント召喚のお膳立ては整えられている。ユグドミレニアはルーマニアという土地柄を活かし、恐らくはあの国において最強のサーヴァントを引き当てている。だが、圧倒的に不利か、と問われれば否だ。

七対七、数の上では公平だ。何より獅子劫には、万能の願望機に縊らなければ叶わぬ願がある。そのことを、ベルフェバンも知っている。

——決まりだな。

獅子劫は頷き、煙草に火をつけた。紫煙を胸一杯に吸い込み、その毒が肺に充満する感覚をしばし愉しむ。ベルフェバンが、不愉快そうな表情を浮かべている——彼は煙草を嫌悪しているのだ。

「ならば、これでマスターは七人揃った。ユグドミレニア一族のマスターは七人、魔術協会が派遣するマスターも七人。つまり、十四騎のサーヴァントがこの世に現界するということになる。恐らく、前代未聞の規模であろうな。戦争というよりは、ここまでに至れば『大戦』と呼ぶに相応しい」

「聖杯大戦、か——」

七騎対七騎。これまでは七騎が互いに相争って勝ち残る戦いだったが、今回はまさに英霊たちの全面戦争だ。……舞台となる都市トゥリファスが、戦後どうなっているか想像もしたくない。

「前払いでギャラを半分くれ。頷いてくれれば、契約というこ」

獅子劫の言葉に、ベルフェバンが顔をしかめた。

「成功報酬で充分だろう？」

「生還率が低いお仕事だ。取れるものは今の内に取っておきたくてね」

「ほう、何か欲しいものもあるのかな？」

獅子劫はソファから立ち上がり、迷うことなく陳列棚にあった子ヒュドラのホルマリン漬けを手にとった。

「これくれ」

「……偽物だが、いいのかね？」

その言葉に、獅子劫は応よと迷うことなく首肯した。たちまち、ベルフェバンは表情を渋いものへと変える。それはそうだろう、このホルマリン漬けは真正正銘の真物である。恐らく獅子劫家の全財産を処分したところで、販売価格の三割にも届くまい。

「じゃ、これは貰っておく」

嬉々とした表情で獅子劫は抱え込み、触媒の入ったケースを手にとった。

「では、ルーミアに飛ぶがいい。監督官と他のマスターたちにはワシから連絡を入れておく。入国次第、向こうからコンタクトを取ってくるだろう」

「ああ、そうだ。爺さん、監督官の名前は？」

去り際に、ふと獅子劫はベルフェバンに尋ねた。こんな戦争に関係するとすれば、第八秘蹟会あたりからの出向という可能性が大きい。もしかすると、名の通った人間かもしれない。

「ワシも直接会った訳ではないが、確かそう……………シロウとかいう神父だった」  
残念ながら、聞き覚えのない名前だった。

獅子劫界離は、直ちにロンドンからルーマニアへと飛び立った。依頼された時点で何かの狩獵ハンティングの可能性を考えて戦闘準備を完全に整えていたため、自宅に戻るというタイムロスせず済んだのは僥倖きようこうだった。

飛行機の中で、ベルフェバンから渡された聖杯戦争に関する文献を徹底的に読み込んだ。サーヴァントに付与される、七つの基本クラスそれぞれの特性。あるいはサーヴァントを従わせ、自害させることすら可能な命令執行権、令呪について。客観的な記録が唯一残っている、第三次聖杯戦争の顛末――。

ちょうどそれらを読破したとき、飛行機がルーマニアに到着した。現在、ルーマニアでは魔術師の渡航規制が敷かれている。万が一にでも、弱い三流魔術師に令呪が発現することのないようにだ。

飛行機から降り立つなり、手の甲に痺れるような痛みが走った。見れば、刺青いれずみのような紋様が手の甲に刻まれている。聖杯が獅子劫をマスターと認め、令呪を顕現させたのだ。ある程度予想していたとはいえ、少し安堵する。これでいつまで経っても令呪が出てこ

なければ、何ともみじめな気分で自宅に帰るだけだった。

獅子劫はルーマニアの首都であるブカレストから、直ちにトゥリファスに向かうとはしなかった。その前に、サーヴァントを召喚するべきと判断したのだ。トゥリファスはユグドミレニアの領地。そこにサーヴァント無しで魔術師が潜入するなど自殺行為以外の何物でもない。

幸いにしてブカレストは六百年近い歴史を持つ都市であり、霊格の高い霊脈も幾つか存在する。午後に到着してすぐにその場所を見て回り、自身と相性の良い霊脈に候補を絞った。本命はスタヴロポレオス教会が管理する墓地の一角、死霊魔術師ネクロマンサーである獅子劫にとつて、やはり死体が埋まった場所というのが、相性として最適らしい。

「サーヴァントにとっちゃ、墓の傍から蘇るのはいい気がしないだろうが……」

陽が沈み、街に夜の帳とほりが下りてから、獅子劫は早速行動を開始した。まず、墓地に人払い用の結界を張り巡らせる。召喚するまで保ってくればいだけなので、術式はそれほど複雑に編んではない。

それから、魔術師の骨粉と血液で練り上げたチョークで魔法陣を描いていく。消去の中に退去、退去の陣を四つ刻んで召喚の陣で囲む、それから陣の中央には水晶玉を置いた。一発勝負ではあったが、その出来映えに獅子劫は満足げに頷いた。

これであと必要なものは捧げるべき触媒と、呪文の詠唱だ。一見して英霊を降霊させる

にはあまりに簡易であるが、マスターは聖杯とサーヴァントを繋げるだけの銚かすがいに過ぎないので、問題はない。

獅子劫が予測していた以上に早く魔法陣が仕上がったせいで、自身の魔力がピークとなる時間まで少し間が空いてしまった。

手持ちぶさたのせいだろう、彼はほとんど無意識に煙草に火を点していた。台湾製の煙草だが、恐ろしく稀少品だ。あの魔術師から一箱譲って貰えたのは、奇跡に等しい。ただし味は酷ひどい。稀少な癖に味が酷いので、吸うたびに世界への無常感を抱いてしまう。

じっくりと名残惜しむように吸いながら、獅子劫は今なら引き返すことができる、と考える。聖杯戦争は世界最小にして最大の戦争、勝者となるはただ一組。……今回はかなり事情が異なるが、いずれにせよ立ちはだかるは一切の『魔術』が通用しない英霊バケモノたち。

漠然と己が願うについて考えた。自身が願うのは、それほど大それたものではない。万能の願望機たる聖杯ならば、容易く叶えることができるだろう。獅子劫界離にとって、その望みは大して切実という訳ではない。むしろ、望みを絶たれたがために——それを受け入れて生きようと、そう信じて今までやってきたはずだった。時計塔を離れ、フリーランスの賞金稼ぎを選んだのもその為だ。なのに、今になってどうに捨てたはずの希望がすぐ目の前、手が届く場所にあった。

「……掴めるものかね」

分らない。この聖杯大戦が、どうなるのか。死ぬかもしれない。いや、その可能性は極めて高い。だが……。

——莫迦な。引き返すというなら、最初に断っている。

分かっている。最早逃げ場はない、渡ってきた橋は自らの手で焼いたのだ。振り返ることではできても、戻することはできない。それでいいのだと、獅子劫は思う。

彼は魔法陣の前に立った。

時刻は間もなく午前二時。日本というなら、草木も眠る丑三つ時。死を司る獅子劫界離にとって、これほど波長の合う時間帯は存在しない。

「始めるか」

声には微かな緊張の色、良好な精神状態を維持していると自己分析する。最後に、自分が所属する色を再確認した。ベルフェバンによれば、ユグドリレニア一族のサーヴァントは「黒」、時計塔が派遣した魔術師たちのサーヴァントは「赤」を自陣の色として定めたらしい。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。手向ける色は「赤」。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路さんさろは循環せよ」詠唱が開始すると同時、内臓を他者の手で弄もてあそばれるような鈍痛と不快感があった。魔術回路が活性化して大気の魔力を変換していき、魔術刻印が励起してそれを補助する。

全身がヒトでありながらヒトでないものへと切り替わる。世界の奇跡を担うための装置、機械部品、あるいは歯車。そういうものに成っていると自覚しながら、獅子劫は更に体内を循環する魔力を加速させるため、アクセルを踏み込んでいく。

召喚陣が赤光を帯びる。遂に始まった奇跡の具現も、今の獅子劫には注意を払うべきものではない。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

SSS

トランシルヴァニア地方、トゥリファス。あの『串刺し公』<sup>カズミラル・ベイ</sup>の生誕地でもあるシギンヨアの北方に位置する小さな都市だ。中世において、トルコ兵の侵入を防ぐために造られた城壁は今もなお完璧な形を残しており、城と都市の一部をぐるりと覆っている。

都市の建物の多くは中世に建築されたものに補修や改築を重ねており、貴重さではシギ

ンヨアラに勝るとも劣らない。人口は約二万、細々とした農業と繊維業でどうにか成り立っている。

そして街の象徴ともいえるのが、小高い丘の上に聳え立つ巨大な城——ミレニア城塞である。この城は中世から現在に至るまで一貫して所有者が交代したことはない。オスマントルコの侵攻、黒死病<sup>ペスト</sup>の大流行、近代の戦争における爆撃など、様々な苦難がトゥリファスに降り注いだ<sup>ト</sup>が、今もなお城塞とその所有者である一族は健在である。

一族の名はユグドミレニア。かつて、北欧からこのルーマニアにやってきた魔術師たちだ。そして今、城内はかつて無かったほどに盛況だった。

ユグドミレニア一族だけではない。どこからやってきたのか、美しい顔立ちをした召使いたちがこまごまと働き、時代遅れも甚だしい斧槍<sup>ハルベド</sup>を手にして城内を巡回している。更に歩き出す石床、目を光らせる石像……。

見る者が見れば、何事かと驚くだろうが——この怪奇なる城塞に踏み込むような無謀な人間は、トゥリファスの素朴な住民には存在しない。城に灯りがついている間は、深夜の外出すら戒めている。

そして数ヶ月前から久しく途絶えていた城の灯りが点り始めると、住民たちは目線を交わして陰鬱な表情を浮かべた。あの城の支配者が、血塗れの暴君たちが戻ってきたのだ！町の平和を祈りつつ、住民たちは日常を過ごしていた——。

深夜二時、都市トゥリファスは既に深い眠りに就いていた。都市を睥睨するミレニア城塞、その一室に窓から外を覗き込む男の姿がある。静まり返る街を眺める男の目は、密やかな決意に燃えていた。

男の名はダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。ユグドミレニア一族の長であり、第三次聖杯戦争において、ナチスドイツ側の魔術師として参戦。大聖杯のドイツ移送を指示した男である。

だが、戦争は既に六十年以上も前の出来事だ。にもかかわらず、男の顔には皺一つとてなく、外見から察せられる年齢は二十代後半といったところだろう。どうやら第三次聖杯戦争以来、彼の時間は停止してしまっただけだ。

「そう、何もかも全てはこの日の為だった」

ダーニックの言葉には、まさに万感の想いが詰まっていた。何しろ第三次聖杯戦争終結後から六十年以上もの間、誰にも怪しまれないよう慎重に準備を整えてきたのだ。

唯一の誤算は、『冬木』の聖杯戦争の情報が拡散したせいで、触媒となる聖遺物があちこちで行方知れずになってしまったことだろう。古の英雄王、最強の聖剣を持つ騎士王、世界の半分を支配した征服王などの触媒は、いずれも散逸して行方知れずだ。とは言え、

一族に命じて数十年にわたり掻き集められた聖遺物は優秀な英霊を召喚するに足るものだ。魔術協会が独自に収集した聖遺物と比較しても決して遜色はない。

そして今宵行うのは四騎の英霊同時召喚、これで六騎。とある事情によって東京は新宿で召喚されたはずのアサシンを含めれば七騎が揃う。

つまり、あと数時間でユグドミレニアによる、魔術協会への叛逆の狼煙が上がるのだ。一つを除いて何もかもが予想通りに事は運んだ。離反を表明した我が一族を殲滅せんとき計塔が動くことも——全く問題なく予測範囲内。

五十人の魔術師がトゥリファスに潜入したことも、街外れの森林で待機して、一晩で勝負をつける手筈を整えていたことも、予測範囲内。熟練のハンターである魔術師五十人が、ダーニックによって召喚されたサーヴァント、ランサーによってわずか三十秒で全滅させられたのは彼の予測を上回っていた、素晴らしい。

唯一予測できなかった綻びは、生き残った魔術師の手で予備システムを起動させられたことである。だが、それもある意味では覚悟の上だ。七騎のサーヴァント全てを従えたとなつては、必ずや魔術協会の妨害があることは理解していた。七騎対七騎、少なくとも数の上では互角なのだ。

無論、魔術協会のことだ。相当にランクの高い英霊を召喚するに違いない。だが、ここルーマニアにおいてランサーのサーヴァントに勝る知名度を持つ英霊は存在しない。召喚

したのは二ヶ月前、それからはランサーの持つ固有スキルを活かし、トゥリファス及びその近辺を領王<sup>ド</sup>が支配する土地に変貌させていた。

この領土内に居る限り、ランサーは全ステータスがランクアップし、宝具の使用が可能になる。唯一の難点は、性格的にやや扱いづらいサーヴァントだということだが、目的が一致している以上、ひとまず問題はあるまいとダーニックは樂觀視していた。

相手方の魔術師も、誰が派遣されたかは掴んでいる。聖堂教会からの監督官を除けば、六人共に己の統べる術を戦闘に特化させた魔術師。だが、彼らはサーヴァントへの魔力供給という致命的なハンデを負っている。そのハンデを解消する術を編み出した自分たちの勝利はやはり揺るがない。

車輪の軋む音に、ダーニックは振り返った。

「——おじ様、もうそろそろ時間ですよ」

柔らかに透き通るような声。車椅子に乗った少女が微笑んでいた。ダーニックも少女の可憐な笑みに釣られるように微笑みを浮かべた。

「調子はどうかな、フィオレ」

「悪くはありません。弟の方はちょっと浮ついていますけれど」

フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニア。ユグドミレニア一族随一の能力を持つ魔術師であり、ダーニックの後継者——即ち、ユグドミレニア一族の次の長になる者と目さ

れている。

一般に“天才”と呼ばれる者には二つの種類がある。一つは広範囲にわたって煌めくような才能を持つ者、そして今一つはある特定の分野において、恐ろしいほどに深い才能を秘めた者。

フィオレは後者である。彼女はほとんどの魔術が不得手であるが、降霊術<sup>エクソシジス</sup>と人体工学に關しては時計塔の一級講師に勝るとも劣らない腕前を持つ。特に独自のアレンジを加えて創り出した数々の接続強化型魔術礼装<sup>プロシズリク・マジェレ・ユレ・タイ</sup>は、三流の魔術師でも一流を仕留めるに足る威力を誇っていた。

血を重ねること数代、ユグドミレニア一族の中で彼女以上の才を持つ魔術師は恐らく当分現れまい。

「まさか姉弟で令呪<sup>あらわ</sup>が顕れるとはな。これが本来の形式<sup>システム</sup>に則った聖杯戦争であれば、悲劇の幕開けだったろう」

「……そうですね、そうなったでしょう」

師弟や実の兄弟でも利害が衝突したなら殺し合うが、魔術師の常識だ。だが、この姉弟の場合はそうではない。単純に、姉と弟とで実力が開きすぎているのだ。恐らくは怯える彼を一方的に殺害するフィオレ、という構図になるだろう。それは、やはり悲劇的だ。

「魔術協会が最後の魔術師を派遣したと聞きました」

「耳が早いな」

ダーニックは苦笑する。時計塔に潜ませている人間から報告があったのは、一時間ほど前のことだ。

「いよいよ始まってしまうんですね……」

「その通り。今日この日を以て、黒と赤のサーヴァントによる聖杯大戦が開戦する。我ら千界樹が、この世界の神秘と奇跡を手に入れるのだ」

「……」

フィオレの憂い顔は、単に争いが嫌だという訳ではない。彼女は一般的な魔術師のように時計塔で学んでいた。学友は今も在籍しているし、取り立てて不満があった訳ではないのだ。当然ながら友と直接敵対する訳ではないが……それでも、やはり何処かにしこりが残る。

もちろん恐怖もある。魔術師の世界において、時計塔とは絶対的な象徴なのだ。西暦元年を機として設立されたあの組織には、あらゆる神秘とあらゆる魔術が集積されている。

まさに世界最先端の魔術機関。フィオレには想像もつかないほどの何かがあの組織には存在するのだ。

だが、一族の長であるダーニックに逆らうこともまた論外だった。百年生きているにもかかわらず肉体は三十代の瑞々しさを保ち、一族随一の魔術刻印を保有している怪物だ。

逆らった瞬間に一族のネットワークから弾き出され、魔術協会に逃げたとしても、その後待っているのは、裏切り者の血縁者としてただひたすら不遇をかこつ人生だ。

それでも、勝算が皆無に等しければフィオレも反対しただろう。だが、そんな彼女が目にしたのは、蒼白の巨大祭壇——無色の魔力を貯蔵し、胎動する大魔法陣。

「お前にだけは見せておこう。ただし、他の者には内密にしておけ」

そう言って、ダーニックは秘匿し続けた大聖杯の下へと彼女を誘った。まだ、完全に稼働していないとは言え、その圧倒量の魔力と神々しさに、フィオレは魂を抜かれた心地になった。

——この願望機であれば、お前が秘めていた願いとて容易に叶えよう。

ダーニックの囁きに抗することはできなかった。彼女にも夢があり、魔術をいくら極めても叶えられない願いがあった。

学友との対立は所詮ただの感傷に過ぎず、目的への到達を阻害するほどのものではない。フィオレは魔術協会との全面対決に、その身を投じる決意を既に行っている。

「では、領王共々立ち会わせて貰おう。我らを守る騎士たちの召喚に」

「はい、おじ様」



二人が召喚儀式の場である王の間に辿り着いた頃には、既に四人のマスターたちが揃っていた。他、雑事をこなすためのホムンクルスたちが、黙々と必要な魔術道具を運ぶ作業をこなしている。

既に魔法陣の紋様は刻まれていた。材料は溶かした金と銀の混合物、常温保持の術式を組み込んでいるため、未だに液状を保っている。複雑にして精緻に描かれたこの魔法陣は、サーヴァントの一斉召喚用に編み出された、特殊なものだ。

ざわめきが不意に消えた。それを見計らって、玉座の傍らに移動したダーニックが大きく手を広げて宣言する。

「——それでは。各自が集めた触媒を祭壇に配置せよ」

マスターたちが頷いた。

一人目——ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア。やや肥満体、その顔からでも尊大な態度を取ることが一目で分かる男。扱う魔術は錬金術。触媒が余程貴重なものなのか、あるいは他のマスターに見せたくないのか、ケースに入れっぱなしだ。

二人目——フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニア。車椅子の少女が扱うのは降霊術<sup>ユリフイイス</sup>及び人体工学。彼女が持つ触媒は、古びた一本の矢。先端が青黒い色に変わっているのは血か何かだろうか。

三人目——セレニケ・アイスコル・ユグドミレニア。扱う魔術は黒魔術。生贄を捧げる

ために獣や人の腹を割き、臓物に接吻<sup>せつぶん</sup>するせいだろう。清廉な姿をしていますが、全身から漂う血腥<sup>ちなまぐさ</sup>さはあまりにも濃厚だった。触媒はガラス瓶。中に何か液状のものが入っていたと思しき染みがわずかに残っている。

四人目——カウレス・フォルヴェッジ・ユグドミレニア。フィオレの弟で魔術系統は召喚術。十八歳とは思えない子供っぽさが垣間見えるのは、顔のそばかすのせいだろうか。やや自信なげに、ぶつぶつと英霊召喚に必要な呪文を繰り返している。触媒は、古い紙。人体図が描かれており、右下には殴り書きで『理想の人間』と書かれていた。

そして、既に召喚を終えた五人目——キャスターのマスター、ロシエ・フレイン・ユグドミレニア。この中では、恐らく最年少。十三歳である彼は、やや離れた場所から興味深そうにその光景を眺めていた。

「ロシエ。君が工房から出てくるとは珍しいな」

ダーニックの呼び掛けに、ロシエが肩を竦めた。

「そりゃ、まあ。英霊の召喚なんて、一生に一度見られれば幸運だろうからね。それが二度見られるんだから、僕も工房から出たくなるさ」

やや背伸びした、大人びた口調だった。これでも、人形工学<sup>ドール・エンジニアリング</sup>ではそれなりに名が通った魔術師だ。外見やデザインに関してはともかくとして、機能という一点を突き詰める、些か芸術性に欠ける人形ではあるのだが。

彼は二ヶ月前、ランサーとは同じタイミングでキャスターを召喚し、彼と共に城内の工房で聖杯大戦に必要な兵士の生産に明け暮れていた。

「キャスターは？」

「先生なら、もうすぐ来るってさ。宝具の設計で忙しいんだけどね」

「キャスターには謝っておこう。では、ここでもう一度あの神秘の儀を眺めたまえ」

「分かったよ」

ロシエが肩を竦めた。ロシエは自身のサーヴァントのことを尊敬を籠めて『先生』と呼んでいる。彼にとつて、あのキャスターが打ち立てた伝説は崇拜に値するものだ。少年は、キャスターに全幅の信頼を置いており、工房で彼の手伝いをするのを、心からの喜びとしていた。

やがて、キャスターがロシエの傍らで実体化した。青いマントと軀に貼り合わせたようなボディースーツ、そして顔には目も口もない無貌の仮面。ロシエが嬉しそうに先生と呼びかけると、キャスターは無言で頷いた。

ダーニツクは召喚者である四人が定位置についたのを確認すると、空位の玉座に向かって恭しく頭を下げた。

「それでは王よ、これより儀式を始めます」

《——うむ》

光の粒子が玉座に集まり、束ねられて一つのヒトガタを作り出す。王と呼ばれた男は、夜に溶け込みそうなほどに黒い貴族服に身を包んでいた。その黒と相反するように、顔はぞっとするほど青白く、絹のように白い髪は無造作に伸ばされている。

彼が出現した瞬間、王の間の雰囲気がさっと緊迫したものへと変わる。ただ立っているだけで圧倒され、視覚で捉えれば震えが止まらない。決して、玉座に座る男が粗野で暴力的という訳ではない。ただ、その冷徹な瞳に晒されると、己がどうしてもなく脆弱で無力な存在だと認識させられるだけである。

この王こそが、ユグドミレニア一族の長であるダーニツクが最強の切り札として準備したサーヴァント、黒のランサー——『ヴラド三世』である。

ルーマニアはトランシルヴァニアにおいて最大の英雄、トルコ兵からは畏怖を籠めて串刺し公と呼ばれた彼は、世界ではもう一つの異名の方が遥かに有名だろう。

小さき竜公……または吸血鬼ドラキュラ伯爵である。

もちろん、眼前のヴラド三世は吸血鬼とは縁遠い人物だ。信仰心に篤い人格者であり、小国とはいえ王として君臨した英雄である。特にルーマニアにおいては、あらゆる国を蹂躪したオスマントルコの侵攻を幾たびも退けた功績によって、ルーマニア独立の大英雄として認識されている。

……そう、この場所がルーマニアである以上、彼の知名度は最高に近い。ギリシャにお

けるヘラクレス、イングランドにおけるアーサー王に匹敵するだろう。  
ダーニツクを一瞥したランサーは、威厳ある声を王の間に響かせた。

「さあ、余の手足となってくれる英霊たちを喚んでくれ」

「御意」

恭しく一礼したダーニツクが、四人のマスターに告げる。

「それでは、始めよう。我が千界樹ユグドラシルが誇る魔術師たち。この儀式の終結と同時に、我らは二度と戻れぬ戦いの道に足を踏み入れることになる。——覚悟はいいな？」

四人のマスターは無言のまま、不退転の決意を露わにする。

王の間の気配が、再び変化する。マスターたちは神経を研ぎ澄ませ、この一時だけは背後で見守る串刺し公カズイクル・ベイの重圧すら撥ね除けた。

サーヴァントの召喚そのものは、確かに通常の複雑怪奇な大儀式よりは簡単だ。だが、英霊を召喚するという極限の神秘、誤れば命を落としかねないのも自明の理。

闇雲に突っ走るのではなく、怯えて石橋を叩き続けるのも愚者の為すこと。今必要なのは、己の頭に銃を突きつけ、速やかに引き金を引く冷酷さと大胆さ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。手向ける色は『黒』。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」  
リハーサルをした訳でもないのに、詠唱は寸分の狂いもなく合致した。

詠唱が一節終わるたび、魔法陣の輝きが加速度的に増していく。荒れ狂う魔力が四人を蹂躪し、陵辱する。だが、この四人の中では格下のカウレスですらしっかりと足を踏み締め、躊躇うことなく詠唱を続けていた。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

詠唱が、魔術回路の内部を駆け巡る魔力が、『座』に存在する英霊を招き寄せる。神話と伝説に刻まれた至高の存在に訴えかける。

「——誓いを此処ここに。我は常世とこよ総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

三人がビタリと詠唱を止める。ただ一人、カウレスのみがこの空白の刻を見計らって、その二節を告げる。

「——されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその

鎖を手繰る者」

狂化するための追加詠唱。これにより、彼の召喚するサーヴァントは大なり小なり狂気に囚われることが確定した。弱きサーヴァントは狂戦士<sup>バグサーガ</sup>として強靱な身体能力を獲得する。

そして、最後の一節。

魔術回路が荒れ狂う痛みと回路暴走への恐怖に苛まれていたにもかかわらず、四人はほんの少しでもこの一瞬が惜しくなった。それほどまでの高揚感がこの儀式にはある。だが、それでも告げる。最高級の神秘をこの手で、握り締めるために。

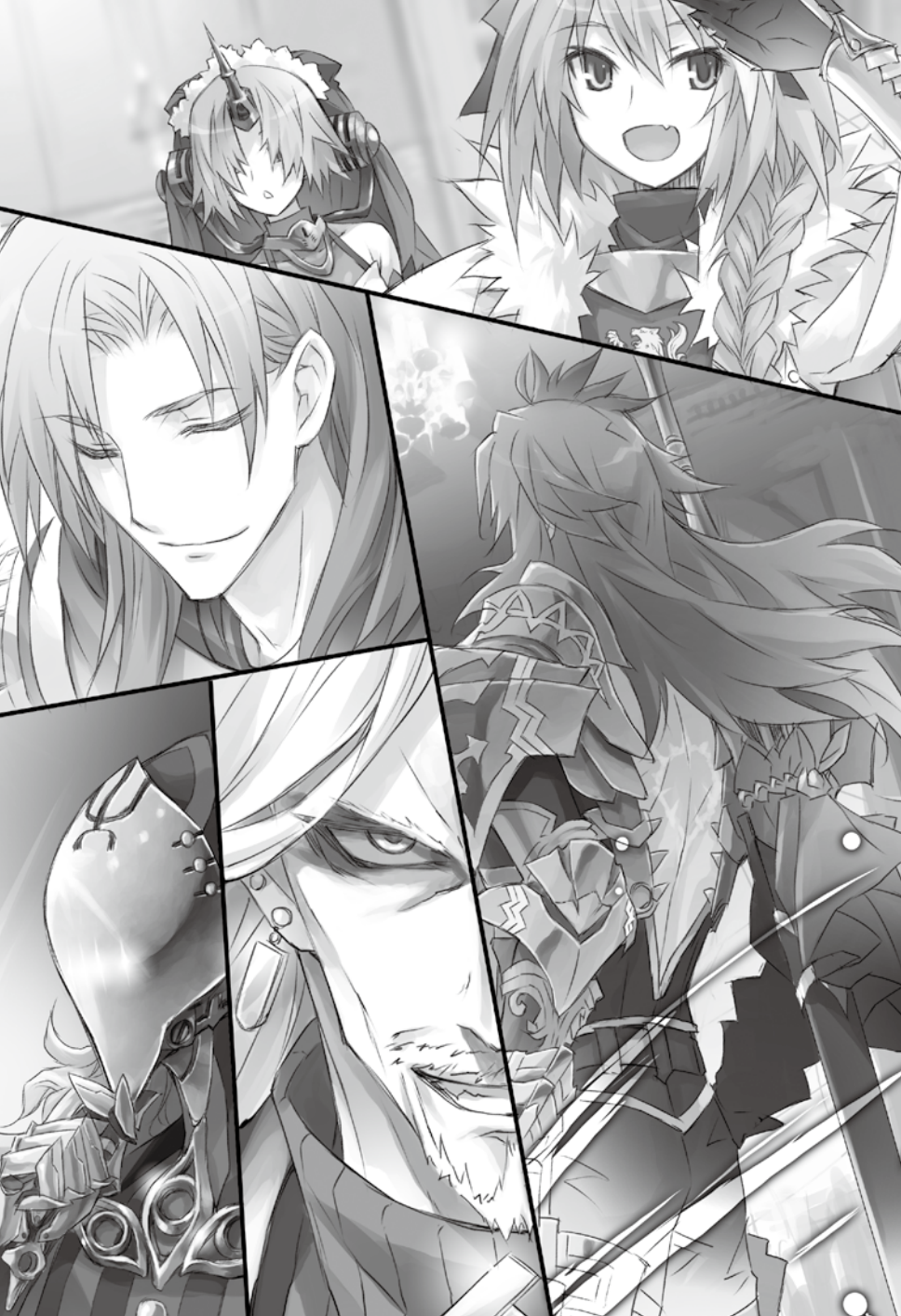
光が満ちる、奇跡が充ちる、魔術を超える超常的な存在——即ち、英霊がこの世界に招かれようとしている。

「——汝三天の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

言葉を告げると同時に、荒れ狂う暴風にホムンクルスたちは慌てて屈み込み、ロシエは顔を手で被った。ランサーとダーニック、そしてキャスターは涼風同然にそれを受け流す。

そうして、「彼ら」は地上に顕現した。

複雑巧緻に編まれた魔法陣からは、目も眩むような光。瞬間、奇跡が具現化する。人の



幻想<sup>ユメ</sup>を肉体とする、人でありながら人ならざる域に達した英雄たち。

暴風は和らいだ風となり、眩い光は薄ぼんやりとしたものに減衰していく。そして、魔法陣には四人の人影。

一人は、白いドレスを着たか細い体軀の少女。手には巨大な戦鎧<sup>メイス</sup>。虚ろな瞳のまま、ゆっくりと周囲を見回している。

一人は、派手に着飾った中性的な少年。四人の中でただ一人、満面の笑みを浮かべて召喚したマスターたちを見つめていた。

一人は、弓と矢を手にした青年。草色のマントに身を包み、片膝を突いて平伏している。

そして最後の一人。燦然と輝く全身鎧に身を包み、大剣を背にした青年。銀灰色の髪が、緩やかな風に揺れていた。

「おお……」

誰かの感嘆。ダーニックもさすがにこの威容には目を奪われる。かくして、サーヴァントたちは声を揃えて始まりの言葉を告げる。七騎のサーヴァントと七騎のサーヴァントが殺し合う凄絶苛烈な聖杯大戦——その火蓋を切る為の言葉を。

『召喚の招きに従い参上した。我ら、黒のサーヴァント。』

我らの運命は千界樹<sup>ユツドミレニア</sup>と共にあり、我らの剣は貴方がたの剣である』

ブカレスト、スタヴロポレオス教会の墓地でもまた、獅子劫界離がサーヴァントの召喚を成功させていた。

「——それで。お前がオレのマスターなんだな？」

全身を鎧で包んだ小柄な騎士はそう問い掛ける。兜越しではあるが、透き通るような声がよく伝わってくる。獅子劫は頷き、手を差し出した。

「獅子劫界離。お前さんのマスターだ、よろしく」

「……ここは墓地か？ 厭な場所ですら召喚するなァ、お前」

差し出された手は黙殺された。獅子劫は頭を掻きつつ弁解する。

「いや、そう言われてもな……。何しろ俺にとっちゃ、ここがホームグラウンドって奴だからな」

「墓地で生まれたのか？」

「屍体と過ごした少年時代さ」

そこまで言ったところで、騎士は納得いったという風に頷いた。

「なるほど。お前死霊魔術師<sup>ネクロマンサー</sup>か」

「ご名答だ。それで、お前はセイバーで合っているか？」

彼が持つ騎士剣を見て、獅子劫はそう問い掛けた。

「当たり前だ、オレがキヤスターやアサシンに見えたなら、相当に目と頭が悪い」

「鎧をガチャガチャ鳴らしまくって、正面突破を仕掛けるアサシンってのも悪くはないと思うが」

世の中にはそういうアサシンもいるらしい。

「……ひょっとして、オレは莫迦なマスターを引き当てたのか？」

「いや。最高のマスターを引き当てたぜ、セイバー。この獅子劫界離、お前の主に相応しい一級のマスターと自負している」

「フム。……口だけでも達者なのはいいコトかね」

「さて、それよりセイバー。まずはお前の真名を教えてくれないか？ ……ってか、何で俺マスターなのにお前のステータスが、一部見えないんだ？」

通常、マスターはサーヴァントと相対した際にある程度の情報を獲得することができ。それは筋力や耐久力などのステータス、保有するスキルなどといった貴重なデータだ。さすがに固有のスキルや宝具といったものは、一度視認しなければ情報更新されることはないが、それでも戦略を組み立てる上で、非常に重宝するものだ。

そして、彼らマスターが最初に確認するのは当然ながら自身が召喚したサーヴァントである。彼らのスペックを理解した上で、どうやって戦うかの策を練り上げるのだから。

だがしかし、目の前の騎士は基礎的なパラメータこそ確認できるものの、英霊の個性である固有スキルや、宝具のデータが遮蔽されていて一切読み取れない。

「この兜のせいだな、今外す」

セイバーがそう言うと、顔を覆っていた兜が分解されて鎧に組み込まれた。露わになった『彼女』の風貌に、獅子劫は開いた口が塞がらなくなった。

「女、か……？」

いや、少年かもしれない。いずれにせよ、随分と若々しい顔立ちをした人間だった。あまりに意表を突かれたせいか、思わず漏らした呟きによって、彼女の機嫌がたちまち悪化したことに獅子劫は気付いていなかった。

「二度と言うな」

「……何だって？」

殺意の籠もった、冷え冷えとした呟きに獅子劫も我を取り戻す。

「次に女と呼ばば、オレは自分を制御できん」

ギラついた瞳で、セイバーは殺意を訴える。どうやら彼女は本気らしい、と獅子劫の本音が囁いた。

「……悪かった、悪かったよ。二度と言わん」

両手を掲げて、獅子劫は素直に謝罪した。セイバーは顔を怒りに歪ませつつも、それで

どうにか機嫌を直したらしい。彼女は深呼吸し、ややふて腐れた表情で呟いた。

「許す。そしてこの話題は二度と口にするな、よく覚えておけ」

「オーケー。それで何だ、お前の真名は——」

「ん？ どういうコトだ、マスター。何を触媒に使ったか知らんが、お前はオレを目当てに喚んだんだろうが。真名など言わずとも——」

「ああ、いや。触媒はこれでね」

少しずつ解れていく魔法陣を避けながら、獅子劫は彼女に触媒を放り投げた。掴んだセイバーは訝しげな表情で手にしたそれを見る。

「何だこれ」

「円卓だ、お前さんたち騎士が使っていたな」

一旦は直ったはずだったセイバーの機嫌が、たちまち急降下で悪くなった。舌打ちして、セイバーはその——恐らくは二度と世に出ぬだろう聖遺物を、躊躇いもなく手にした剣で斬りつけた。

「……おうい」

文字通り、木っ端となったそれをセイバーは具足で踏みしめる。

「忌々しい！ まさか、こんなモノで喚ばれたとはな！」

その表情は心底から円卓を疎ましいと憎悪していた。これはおかしい、と獅子劫は思う。

円卓は騎士たちにとって、談論風発の場所であつたはずだ。最終的に、円卓の騎士は敵味方に分かれることになったが、それとて本意ではなかつたろう。もし、この円卓をそのままで憎悪するとしたなら——。

獅子劫は彼女の真名に、はたと思ひ至った。もし、円卓を憎悪する騎士がいるとすれば、それは騎士王に対して、明確に叛逆したただ一人の円卓の騎士。

「セイバー。お前の真名は、もしかして『モードレッド』か？」

獅子劫の問い掛けに、モードレッドはわずかに顔をしかめた。今しがたの行動で当てられたことに、些か忸怩たるものがあるらしい。

それでも、彼女は毅然とした口調で告げた。

「——その通り。我が名はモードレッド。騎士王アーサー・ペンドラゴンの唯一にして正統なる後継者だ」

「……お前、叛逆したんじゃないかったか」

獅子劫の指摘に、セイバーはさつと顔を紅潮させて告げる。

「ああ、その通り。オレは確かに叛逆した。あの王は、とうとう我が力を最後まで認めなかった。剣の腕も、政も、オレは王と同じ——いや、それ以上にこなしていたはずだ。だが、あの王めはオレの出自を理由に即位を拒んだ」

冷ややかな声色は、決して激情を鎮めた訳ではない、むしろ逆だ。その全身を震えさせ

るほどの憤怒と憎悪を、彼女は体内に宿している。

彼女の出自、それは——モードレッドは、アーサー王とその実の姉であるモルガンとの間に生まれた不貞の子という、あまりにも致命的なものだった。

「だから、叛逆して終わらせた。あの王の治世には、何の意味もなかったと思い知らせてやったのさ」

そう。伝説によれば、確かにあのアーサー王を死に追いやったのはこのモードレッドだ。

聖槍で貫かれてもなお、このモードレッドはアーサー王に致命的な一撃を与えた。

瀕死のアーサー王は聖剣を湖に返して妖精郷へと向かい、このモードレッドはカムランの丘で息絶える。後に残されたのは、叛逆の騎士という悪名だけだ。

「ふむ。ってことは、セイバー。お前の願いは王になることか？」

即位を拒まれたモードレッドにとつて、王になるというのはまさに聖杯に叶えて貰うべき願いに違いない。だが、モードレッドは獅子劫の言葉に尊大な口調で告げた。

「いいや、違う。聖杯の力で王になる気はない。それでは、オレが王位に就いてもあの父上は決して認めない。オレの願いはな、マスター。選定の剣に挑戦させて欲しい、ただそれだけだ」

「……選定の剣。アーサー王が引き抜いたというあれか」

セイバーは頷いた。そう、かのアーサー王は少年のとき、国中の力自慢が挑戦して敗れ

去ったその剣を引き抜くことで、王になる資格を得たという。

もし、モードレッドがその剣を引き抜けたとしたら、確かに王たる資格があると認められたことになる。だが、彼女の願いには一つ致命的な穴がある。

「——なあ、一つ聞いていいか？」

「ああ」

「聖杯で願いを叶えたとして、引き抜けなかったらどうするんだ？」

そう。選定の剣への挑戦というならば、当然引き抜けない可能性もある。何しろ、国中の男たちが果たせなかった剣だ。アーサー王の血を引くモードレッドとて、引き抜けるかどうか、正直に言っただけのものだ。

「愚かな問い掛けだ、マスター。オレが引き抜けないはずがない！」

だがしかし。セイバーは胸を張ってそう断言した。その声から窺われる威圧は、確かに王として相応しい風格を持っている。もしかしたら、彼女なら容易く剣を引き抜けるのかもしれない。

「では、マスター。早速だが、指示を出せ。討つべき敵はどこにいる？」

どこか弾んだ声で迫るモードレッドを、獅子劫はまあまあと宥めた。

「……急いては事をし損じるって諺、聞いたことないか？」

「知るか、そんなモノ。オレは七騎の敵を斬るために喚ばれたんだろうが」



どうやら、この聖杯大戦に関する知識は聖杯から与えられているらしい。

「そりゃそうだがな。まだ向こうの七騎がどうなったのが分かってない」

空からの小さな羽音に、二人は揃って顔を上に向けた。木の枝に、灰色の鳩が止まっている。何の感情も窺わせない鳥独特の目をせわしなく動かし、口に咥えていた紙をべっと吐き捨てた。それで鳩は用は済んだとばかりに飛んでいく。獅子劫がそれを拾い上げると、セイバーも興味深そうにそれを覗き込んだ。

「使い魔か？」

「そうらしい。今すぐ俺たちに会いたいときさ」

「誰がだ？」

「俺たちと利害が一致している連中だ」

獅子劫は『明日朝九時 シギシヨアラ 山上教会』とだけ書かれていたメモをくしやりと握り潰した。

# SSS

壮観にして壮麗、荘厳にして凜然。その光景を言い表すに足る言葉は、百の賞賛を重ねてもまだ足りないだろう。

「黒」のセイバー、「黒」のアーチャー、「黒」のランサー、「黒」のライダー、「黒」のバーサーカー、「黒」のキャスター。新宿で召喚されたアサシンを除く六騎が、この王の間に集結していた。

聖杯戦争という状況下で、同じ空間に存在するサーヴァントが二人を上回することは滅多にない。同盟、あるいは戦闘にせよせいぜいが二騎から三騎。しかも、互いを殺し合おうと油断無く見据えている状態が普通だ。

彼らは新たな形の戦争——聖杯大戦を受け入れ、共闘をあっさりと受諾した。

「あ、自己紹介した方がいいかい？ いいよね？ やるよ！ ボクはサーヴァント、ライダー。真名はアストルフォ。で、君は？」

——と、誰かが口を開くより先にライダーのサーヴァント、アストルフォがそう口火を切った。

自分の横にいたサーヴァント、穏やかな風貌をした青年は多少面食らいながらも微笑んで応じた。

「サーヴァント、アーチャー。我が真名はケイローンです」

「ありがと、ケイローン。しばらくの間、よろしくね！」

ライダーが手を差し出すと、アーチャーは困った顔で応じた。

「ライダー。真名で呼ばずに、クラス名で呼びかけたまえ」

ダーニックが渋い表情でライダーを制止する。ライダーはああそうか、と頷いて今度は白いドレスのサーヴァントに声を掛けた。

「ね、君は？」

「……」

サーヴァントは沈黙。ふるふると首を横に振り、拒絶の意を表している。

「ああ、ゴメンゴメン。喋れないなら仕方ないか。えーと、彼女のマスターは？」

ライダーが自分たちのマスターを見回し、視線に反応したカウレスに目をつけた。

「ね、そのマスター。彼女の真名は？」

「あ、ええと、その——」

近付かれたカウレスはあたふたと対処を考えるが、ライダーに穴が空くほど見つめられることに耐えられなくなったらしく、小さな声で真名を呟いた。

「……フランケンシュタイン」

「なるほど。それじゃ、フラン……じゃなくて、バーサーカー。よろしくね」

サーヴァント、バーサーカー——フランケンシュタインは、自身の名を明かされたことに不満げな呻きを漏らした。

そして、ライダーの視線が最後に残ったサーヴァント——セイバーに向けられる。

「それで。君の真名は？」

「待て、セイバー。お前は喋るな」

セイバーが答えるより先に、彼のマスターであるゴールドが制止した。彼はダーニックを含めた全員に宣言するように告げる。

「私は、このサーヴァントの真名をダーニック以外に開示する気はない」

ざわめきが王の間に満ちる。セレニケが寒々とするような声で尋ねた。

「——真名の開示は、予め申し合わせていたことでしょうか？ それを反故にするというのは、不愉快極まるわね」

「あのと私の私は、まだ触媒を手に入れてなかったのな」

そう言いつつ、ゴールドはケースを大事そうに抱えた。触媒すら徹底して隠し通すつもりらしい。

「ゴールド叔父様。真名を隠し通すことが、それほど大事なのですか？」

フィオレの問いにゴールドは渋い表情で首肯した。

「……私のサーヴァントは、真名の開示が致命的でな。漏れる口は、できるだけ少ない方がいい」

真名とは各サーヴァントにとって、できるだけ秘匿せねばならない情報だ。どれほど名

高き英雄であろうとも、末路は非業の死であることが多い。

真名の露呈は、その死に至った理由を致命的な弱点として露出してしまうのだ。

毒で殺されたならば、何らかの形で毒を与えればいい。矢で射殺されたというなら、矢を放てばいい。特定の箇所が弱点なら、そこを狙えばいい。

たとえ死に至った理由に弱点が見当たらずとも、竜の因子を持つ英雄ならば竜殺しの武器と相性が悪い。そんな武器を都合よく所有しておらずとも、他のマスターたちに情報を明かせば、何らかの形で対策が練られる可能性が高い。

無論、真名を明かしたところで何の問題もないサーヴァントもいる。ライダーであるアストルフォなどはその典型だ。

ダーニツクはちらりとヴラド三世を見た。彼はその視線に涼やかな笑みで頷いた。もちろんダーニツクのサーヴァントであるヴラド三世は、ゴールドが召喚した「黒」のセイバーが何者であるかなど知っている。故に、苛烈で知られる王は鷹揚に頷いた。

「——分かった。では、お前たちに特例を許す」

一族の長であるダーニツクの言葉に、ゴールドは満足げな笑みを浮かべた。

「王よ、大いに感謝します。では、私はこれで失礼する」

背筋をしゃんと伸ばしたゴールドは、セイバーを付き従わせて堂々と王の間を退出した。それを見送ったセレニケが、不機嫌そうな呟きを漏らす。

「セイバーを召喚しただけでしょうに。随分とまあ偉そうな」

「あれは元からそういう生き物だ」

ダーニツクが苦笑交じりに呟いた。かつて錬金術ではアインツベルンに並ぶ名門と謳われたムジーク家、その継承者がゴールドである。もっとも、ムジーク家がユグドミレニア一族に組み込まれたときには、魔術師としての血は衰退の一途を辿っていたのだ。

かつての名門にとって、ユグドミレニアに吸収されるというのは余程の屈辱だったのだろう。幼い頃から、ゴールドは父と母にムジークの家が如何に優れた錬金術の大家だったかを教え込まれた。三十六歳になってなお現実と夢想の区別ができず、名門であつたという誇りだけが立派に成長してしまった。

これはムジーク家がユグドミレニア一族に名を連ねてから、最初に生まれた子供であるゴールドが久しぶりに誕生した一級の魔術師だったというのも、血統への誇りを過剰にさせることに一役買ったのだろう。

もっとも、彼が優秀な魔術師であることは確かだった。彼は此度の聖杯戦争における、反則級のシステム干涉——魔力の経路の分割を提案し、実現にこぎ着けた人間だ。

如何に魔術協会が派遣した魔術師が優れているにせよ、サーヴァントの召喚、そして彼らへの魔力供給は厄介な足枷となる。それが無いだけで、実力差は格段に縮まるだろう。更に、潤沢な魔力は宝具の濫用も可能にする。ゴールドの功績は、決して無視できるもので

はなかった。……傲慢であることに、目を瞑らなければならないほどに。

意気揚々と私室に戻ったゴルドは、改めてセイバーと向かい合った。その壮麗にして威風堂々たる姿に、目を奪われる。ほぼ確信に近いものを抱いているが、それでも念には念をと、ゴルドは問い質す。

「セイバー、一つだけ答えろ。お前の真名は、ジークフリートに相違ないな？」

肯定の頷きを返され、ゴルドの歓喜は頂点に達した。

ジークフリート——ドイツにおける国民的英雄。複数の伝説でそれぞれ人物像は異なるものの、もともとも有名なものは英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』であろう。ネーデルラントの王子として生まれた彼は、数多の冒険を成し遂げ、ついには竜殺しの称号を冠するまでに至った。

裏切りの刃を唯一の弱点である背に受けるまで、彼はあらゆる戦いで一度たりとも敗北せぬまま、その命を散らした。

彼の手には、ニーベルンゲン族の聖剣バルムンク。この剣で邪悪なる竜を滅ぼし、その血を浴びた彼はあらゆる武器で傷つけられることがない。

いとも気高き勇者はしかし、その身に一つだけ致命的な弱点を帯びている——。竜の血を浴びた際、たまたま貼り付いていた菩提樹の葉が覆い隠した背の部分。それこそが、ジ

ークフリートを問答無用で死に至らしめる弱点である。

ゴルドはしばし悩んだ。最強のサーヴァントを手に入れた方がいいが、同時に彼の背にまつわる伝説は、広く人口に膾炙しているのも事実。あまりにも致命的で、あまりにも明瞭な弱点を、果たしていつまで隠し通せるものか。

「セイバー。お前はこれから、宝具の開帳時以外は口を閉じている。私が許可したときのみ、口を開くことを許す」

ひとまず、ゴルドはセイバーの口を閉じさせることで、真名の手掛かりを少しでも減らすことにした。彼は手の甲にある令呪を誇示することで、この命令が極めて厳密であることを強調する。だが、その瞳には微かな怯えがある。かの大英雄にここまで居丈高に接することは許されるのか——許してくれるのか。

一方で、ゴルドの中では「所詮サーヴァント」という認識が脳裏から離れない。彼は自分によって生かされているかりそめの客人に過ぎないのだから。わずかな緊張の時間が、部屋に流れる。

「……」

しばらくの後、分かりましたと言う代わりにセイバーは頷きを返すことで、ゴルドの命令を受諾したという意思表示を行った。ジークフリートは王族であり、一軍を率いる将として幾つかの伝説も残している。だが彼は同時に頼まれ、乞われ続けた英雄でもある。

喋るなど命令され、それに必然性があるならば彼にも異存はない。彼は己の望みが果たされるならば、どんな命令も苦にせず執行するつもりであった。

——もしも。この時令呪を使われたとしても、決然と異を唱えていれば、その後の運命はまた違っていたかもしれない。ジークフリートはサーヴァント、セイバーとして服従することを選んだ。そしてゴールドもまた、マスターとしてサーヴァントを屈服させたと認識してしまったのだ。

後々になって、このすれ違いは致命的な事態を招くことになる。

一方、王の間ではそれぞれのマスターとサーヴァントが交流を開始していた。

「私が貴方のマスター。フィオレと呼んでください、どうぞよろしくお願いします」

フィオレが差し出した手を、黒のアーチャーは恭しく両手で包み込んだ。

「ありがとう、フィオレ。貴女のサーヴァントとして、ケイローンの名に恥じぬ活躍をお見せしましょう」

「……」

フィオレは困惑したように沈黙し、アーチャーの顔を見る。

「どうしました？」

「あ、いえ。本当に、貴方はケイローンなのですね。理解してはいるのですが——」

「信じ難い、と？」

微笑みを絶やさぬアーチャーの言葉に、フィオレは小さく頷いた。

「道理ですね。本来であれば、私は人ならざる姿で召喚されるべき存在です」

ケイローン——ヘラクレスを始めとする数多の大英雄たちに教えを授けた、ケンタウロス族随一の賢者である。

上半身が人間、下半身が馬として生まれた彼は大地と農耕の神クロノスを父に、女神ピリュラーを母に持った完全なる神霊である。だが、誤ってヒュドラの毒矢を受けてしまい、苦痛から逃れるために不死性を捨てた。そしてこのとき、彼は不死性と共に完全なる神性をも失って、英霊として召喚されるに足る存在となった。

無論、半人半馬という本来の姿でもサーヴァントとして召喚されることには問題ないのだが——。

「ですが、あの姿では視認されただけで真名が絞り込まれます。致し方ないとお思いください」

半人半馬、という姿を見た時点でケンタウロスを連想しない人間はおらず、名の有る英雄と言えば、まず真つ先にケイローンが浮かび上がるだろう。弓と矢を持っていれば尚更だ。何しろケイローンは空に浮かぶ射手座<sup>サジタarius</sup>のモデルとなった英霊である。

故に、ケイローンは召喚されたとき、人のカタチを取ることにした。代償として一部ステータスがランクダウンしているものの、弓を扱う分には特に影響がある訳ではない。

「ええ、もちろん分かっております」

フィオレは慌てて頷いた。そう、確かに外見は穏やかな顔立ちの青年であり、服装がやや古めかしいこと以外、ケイローンという大賢人を窺わせるものは何もない。

しかし直接相対しているフィオレは、目の前にいるアーチャーから発せられる気配に、圧倒されないでいるのが精一杯だ。彼の持つ気配は、喻えるなら広大な森のようだった。ちっぽけな己を深く包み込む清冽なる空気が――。

「無論、言葉を並べ立てて私を信頼してくださいるようお願いするのは簡単です。ですが、私はアーチャーのサーヴァント。どうか戦場にて我が弓を御覧あれ。必ずや貴女のサーヴァントに相応しき者と証明してみせましょう」

「……はい。期待しています、アーチャー」

フィオレは羞じらうように頷き、アーチャーと共に王の間を退出した。

「バーサーカー、俺たちも行こう。霊体化するぞ、分かるな？」

「……アア……ウウ……」

カウレスの言葉に「黒」のバーサーカーは同意らしき呻きを発し、粒子となって消えた。汗を拭い、安堵の息をつくカウレス。どうやら相当に消耗したようだ。やはり、フォル

ヴェッジ家の才能は全て、あの姉に流れてしまったのだろう。

残念なことに、カウレスのマスター適性が劣っていたのと、彼が召喚したバーサーカー……即ち人造生命体フランケンシュタインは、比較的その神秘が新しいこともあってか、狂化でステータスをランクアップさせても、ステータス的には目立つところがない。とは言え、彼女の真価は独自に保有するスキルにある。

だが有り体に言えばダーニツクはカウレスとバーサーカーに対して、さほど期待していない。バーサーカーは元より戦闘の際の指示など一切受け付けない。ただ狂気の赴くままに戦い、そして果てるが定め。令呪を用いて上手く運用すれば戦場に破壊を撒き散らし、混乱の内に数多の将を討つことも可能だろう。そのタイミングは、自分が見極めればいいとダーニツクは考えていた。

カウレスは憔悴した様子で王の間を退去した。

「さて、ライダー。ひとまずこの城を案内するわ。貴方、好奇心が旺盛な方でしょ？」

セレニケの言葉に、「黒」のライダーは照れたように頭を掻いた。

「あ、分かる？ だからその、霊体化はあまりしたくないなーって」

「……いいわ。なら、貴方の部屋を用意させるわ」

「本当!? いやあ、話が分かるマスターを持って幸せだな、ボク！」

ライダーはくると踊るように回る。ばんざーいと両腕を掲げて、自身の願いが叶っ

たことに屈託無く喜んでいた。

ライダーが懸念していたのは、実体化し続けることによる魔力負担だろう。いかに聖杯のバックアップがあるとは言え、神秘を具現化し続けるということは相当の負担がかかる。何より突き詰めれば、サーヴァントは戦闘以外の部分では霊体化させ続けていても問題ないのだ。だが、それはあくまでマスター側に立った考えだ。サーヴァントの中には、第二の生への喜びを重視し、マスターの負担など素知らぬ顔で実体化し続けることを望む者もいる。

ライダーのサーヴァント、アストルフォはまさに好奇心の塊のような存在である。もしマスターであるセレニケが許してくれるならば———というか許してくれなくとも———彼は今すぐにでも城を飛び出し、街で遊興に耽<sup>ふけ</sup>るだろう。

シャルルマーニュ十二勇士中、屈指の美丈夫にして能天気、理性が蒸発しているとすら言われる青年アストルフォ。その姿はあまりにも意外であったが、伝説はどこかで歪むものだ。その可憐な容姿は、充分マスターであるセレニケの好みの範疇<sup>はんちゆう</sup>だった。

「さあ、先生。儀式は終わりました。工房に戻りましょう」

「……そうしよう」

ロシェと、彼のサーヴァントである「黒」のキャスターもまた、王の間から退去した。

マスターたちを見送ったダーニツクは、ホームクルスたちも下がらせた。そうして二人きりになると、玉座に座るランサーに告げた。

「これで、六騎。アサシンも、もう間もなく到着するでしょう」

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカー、キャスター、アサシン。かつての聖杯戦争であれば、彼ら七騎は一騎一騎が戦略を練り上げ、戦術を以て戦うが当然だった。

だが、此度の戦争は大きくその様相が異なる。何故なら、戦力は一騎ではなく七騎。サーヴァントの基本クラス全てである。『冬木の』聖杯戦争において、戦い抜くことが非常に困難なバーサーカー、キャスター、アサシンのようなクラスでも、その真価を存分に発揮できるのだ。

例えば、既にロシェが召喚したキャスターは千を超えるゴーレムの生産に取りかかっている。小型、中型、大型に分類されたゴーレムたちは、今か今かと戦うときを待っている。無論、彼らではサーヴァントに敵うべくもない。だが、足止めとしては十分に価値があるし、キャスターやアサシンといった近接戦闘が不得手なサーヴァントならば、大物食<sup>ジャイアントキリング</sup>いの可能性すら見えてくる。

「……ダーニツク。余がどんな気分に分かるか？」

うつすらと機嫌良く笑っている様を見れば、明々白白であったがダーニツクはあえて問

い掛けることにした。

「いえ。私のような卑小な魔術師如きに、『小<sup>ドラ</sup>き竜<sup>キュウ</sup>公』と謳<sup>うた</sup>われた公のお考えになることなど、熟慮に熟慮を重ねてもなお遠いでしよう」

途端、ランサーは不愉快そうにダーニックを一瞥した。

「追<sup>つい</sup>従<sup>しゅう</sup>も度が過ぎると度量が知れるぞ、ダーニック。余を領<sup>ロイド</sup>主と呼ぶお前は、我が主人<sup>マスター</sup>でもある。余はサーヴァント、そのことを否定はせん」

「……は」

やり過ぎたか、とダーニックは内心で舌打ちする。とはいえ、ランサー……ヴラド三世は、かつてこのルーマニアを支配していた一国の王。いくら世界から外れ、人倫にもとる所業を顔色一つ変えずに行う魔術師といえども、敬意を払<sup>や</sup>うに吝<sup>きん</sup>かではない。

もちろん、そこには『令呪』という絶対的な格差があつてのもの。いざというときの首輪があるからこそその忠誠とも言えるが。

「余はな、ダーニック。この国をトルコから守るために、半生を費やした。王としてやれるだけの政をこなしたが、足りなかったものがあつた」

「それは、一体？」

「人<sup>ヒト</sup>だ。一軍を任せるに足る一騎当千の将が足りなかった。余は戦い、勝利することに全てを費やしたが、逆に言えばそれ以外は何もできなかった。無能という訳ではないぞ？

ただ単純に——」

「時間と人、それが足りなかったと」

ダーニックの言葉に、ランサーは満足げに頷いた。

「そして余は、遂にかけがえのない『人』を得た。六騎の英霊、中でもセイバー——ジークフリートとは。余が考え得る限り、もっとも素晴らしい勇者だとも！」

——そう。ゴルドを除けばダーニックとランサーだけはあのセイバーが如何なる英霊かを知っていた。ゴルドの触媒は、血に染まった菩提樹の葉。恐らく、旧知の仲であるアインツベルンのツテを頼ったのだろうが、それでもまさか、あんな聖遺物を手に入れるとは、並大抵の幸運ではない。

「セイバーだけではない。ギリシャの大賢人ケイローン、シャルルマーニュ十二勇士のアストルフォ、フランケンシュタイン博士の狂気の産物たるバーサーカー、そしてキャスターのサーヴァント、アヴィケブロン。偏屈ではあるが、あの男が造り出す兵士<sup>イレム</sup>はこの上ない戦力だ」

「皆、公の配下、公の将です」

「——ああ、口惜しいな。彼らがいれば、あの城に幽閉されることもなかったろうに」

一四六二年、ハンガリーの王マーチャーシュはヴラド三世をオスマントルコの協力者として捕らえ、十二年もの間幽閉した。



国を守るために戦った功績を全て穢され、気付けば血に餓えた悪鬼として語り継がれるという屈辱。

「だが、所詮は夢物語ほどに遠い過去だ。余が考えねばならぬのは、<sup>いま</sup>現在。血に塗れた哀れな我が名だ」

「ご安心下さい。七騎のサーヴァント全てを打ち倒すことによって、万能の願望機たる大聖杯は起動し、必ずや公の願いを叶えましょう」

己が名譽の復権——それが、ランサーのサーヴァントたるヴラド三世の願望である。世界に広がった『吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>ドラキュラ』という汚名を雪ぐ<sup>そと</sup>。

辿ってきた道のりを否定するつもりはない。トルコと戦い、幽閉されて不遇の刻を送ったこともまた、人生と諦めよう。だが、自分とは全く関係のないところで、自身の名を泥で穢されることだけは、どうしても許せない。

ランサーがこの聖杯戦争に懸ける意気込みは、全サーヴァントの中でも随一だろう。その執念もまた、ダーニックは好んでいた。

「後はアサシンのサーヴァントか。確か極東の小国で召喚されたのだったな、ダーニック」

「ええ。本来はロンドンで召喚するべきサーヴァントですが、何しろ今の我々にとってあの場は敵地。故にあの英霊にとって霊脈の相性が良い場所で召喚しよう」と

「名前は何だったかな？」

「——ジャック・ザ・リップパー。百年前、かの英国を震え上がらせた連続殺人鬼<sup>シリアルキラー</sup>です」

### SSS

#### ルーマニア ブカレスト

二十世紀初頭、ルーマニアの首都ブカレストは『小さなパリ<sup>リトルパリ</sup>』と呼ばれていた。だが、第二次世界大戦時の爆撃、二度の大地震、そして独裁者チャウシエスクの誇大妄想的な都市開発によって、当時あった秀麗な建築物の多くは破壊されてしまった。無論、全てが破壊された訳ではない。都市を南北に貫くヴィクトリア通りを車で走れば、旧市街の古い教会や歴史的に貴重な建物が幾つも目につくことだろう。

だが、独裁者がルーマニアに刻んだ傷はこればかりではない。

「チャウシエスクの子供たち、って言うらしいわねえ」

どこか甘く、浮世離れた声で女は囁いた。ただほんの少し、憂いを帯びた表情を浮かべるだけで、男を狂わせるような蠱惑的な女だった。だが奇妙なことに、その甘い響きを

聞き届けるはずの『誰か』が、彼女の周囲には存在しない。

虚空に向かつて呟く女を、すれ違う人間が訝しげに見送る。声を掛けよう、と思い立つ若者たちもいたが、彼女の瞳に何か狂気めいたものを感じたせいだろうか。全員が気圧されて、あっさりと諦めた。

「そう、そうなの。悲しいことね——私は、そこまでは至らなかった。ただ、気付いたらああなったというだけ」

女は誰かと語り合うように言葉を紡いでいる。チャウシエスクの子供たち、とは独裁者が残した負の遺産の一つだ。かつてルーマニアは法で避妊と堕胎を禁止し、最低でも五人以上の子供を産むことを強制しようとした。

結果、育てきれなくなった子供たちはストリートチルドレンとなり、犯罪や人身売買に手を染めていく。たとえ革命で独裁が終わっても、一度産み出された命が元に戻ることはない。彼らはマフィアや権力者によって、その小さな命を食い散らかされていった。生き残った者は、喰われる側から喰らう側にいつのまにか回っていた。

女は女にしか見えぬ何かと語り合いながら、ふらふらと夜のブカレストを歩いていく。うら若い女がたった一人で歩いている——トラブルを引き寄せる誘蛾灯のようなものだ。既に、彼女を尾行する若者が二人。官憲の目が届かず、人通りも少ないことを見計らって一気に間を詰めていた。

女はふわふわと足取りも軽く、無謀にもビルに挟まれた路地裏へと入り込んだ。既に、彼らは女の持つバッグを盗む程度では収まりがつかなくなっている。観光客が一人消えたところで、誰も見つけようとはしない。金を、体を、そして人生全て——あらゆるモノを、徹底的に奪い尽くすつもりで二人は女の肩に手を伸ばす。

——ここならば、悲鳴を上げてでも大して誰も気にしない。

男たちはそう思った。だが——女の方も同じことを考えているとは思わなかっただろう。女にとって必要な生者は一人だけ。もう一方は不要だった。……女が漠然と『不要』と選んだ方は、本当に幸運だった。

手を伸ばした方の男が「あれ？」と呟きを漏らした。伸ばした手が、何故か女の肩に触れなかった。一瞬、自分は幽霊を掴もうとしたのかと肝を冷やす。だが、放出する血と激痛を訴える手首の断面を確認して、ようやく自分が何をされたのか理解した。

ああ、どうやら手首を斬られたらしい。何故だろう、と首を傾げようとして——ようやく、その深刻な事実を理解した。

「ああういああういあああ!？」

悲鳴を上げた瞬間、更に痛みが押し寄せた。今度の痛みはほんのわずかだったが、続けざまの喪失感が恐ろしかった。何しろ、裂かれた腹部からどぼどぼと落ちてはならないものが落ちていくのだから。

えい、と可愛らしい掛け声。……男は本当に幸運だった。頭を吹き飛ばされて即死するなど、生き残ったもう一方の男に言わせれば、全財産をはたいてでも代わって貰いたかった死に様だろう。

「……え？」

たまたま、選ばれなかった男はぼんやりと立っている。片割れの男が手を伸ばした瞬間、腕を斬られて腹を裂かれ頭を吹き飛ばされた。まるで意味が分からない。理不尽にも程がある。思考が停止する。

「あ……」

しばらくして、ようやく気付く。自分たちは、誘蛾灯に惹かれた蛾に過ぎない。光に集まった蛾は、殺滅されるが定めなのだと。

股間から冷たい感触——それが何なのか、気付きもせずに男は女から背を向けて逃げた。否、逃げようとした。

振り返った瞬間、ひよいと突き出た足に転ばされた。立ち上がろうとするが、素早く誰かに押さえつけられる。

女ではない。彼女は変わらず、ぼんやりとした態度で男を眺めている。では、自分を腕一本で押さえつけているのは誰なのだろう？

「おかあさん。こっちはどうするの？」

——絶句した。

玲瓏<sup>れいろう</sup>な声で、男を押さえつけているのは子供だった。一瞬の安堵、撥ね除けようと男は渾身の力を籠めて、細い腕を掴む。

だが、子供の細い腕はびくともしない。本気を出している、これ以上ないくらい腕を握り締めている。なのに、子供の腕は鋼鉄のようにビクともしないのだ。

男は子供を殴りつける。拳に伝わる柔らかい感触は、この腕が義手でも何でもないことを教えてくれる。では何故、どうして自分の本気の拳は、彼女の細い腕を一ミリも動かさないのか。

無様な悲鳴を上げた。ポケットからナイフを取り出し、子供の腕に突き立てる。恥も外聞もない、とにかくこの異常な状況から逃れようと何度も何度も刺突<sup>しき</sup>する。

突き立てる、突き立てる、ただただ必死に突き立てる。なのに、なにに何故、どうして——どうして、どうして傷ついてすらくれないのか！

「あら、ねえ。痛くないの？」

女の問いに、子供が振り向いた。男はそれに気付かず、ナイフを突き立てる。

「だいじょうぶだよ。サーヴァントだもん。ぜんぜん、痛くない。でもちよっとうつとうしいかな」

「じゃ、少し斬ってもいいわよ。でも、喋れなくなるから喉は駄目ね」

「わかった、おかあさん<sup>マスタ</sup>」

頷いた子供が、ナイフを手を取った。マスターの命令通り、鬱陶しいナイフを止めるために手首の腱を切り、胸、首、太腿、顔あたりを死なない程度に血塗れにした。

「よしよし、ちょっと待ってね」

ナイフを的確に振るい続ける子供を制止して、女が男に呼びかける。

「ねえ。——貴方の仲間って、沢山いるのでしょうか？ どこにいるの？ 建物の名前と、

それがある通りの名を教えてくれないかしら」

男は完全に戦意を喪失していた。女の質問に、捲し立てるように真実を語る。とにかく、何でも良かった。自分ができることがあるなら喜んでする。靴を舐めると命令されれば、躊躇いなく舐めていただろう。

女は男の告白を聞きながら、ガイドブックの地図で彼が指し示す場所を確認した。よし、と呟いて女は軽く子供の肩を叩いた。

「ジャック。食べていいわよ」

食べて、いい？

言葉の意味が分からず、男は思わず問い質そうとする。ジャック、と呼ばれた子供が男の顔を覗き込む——たまたらず、絶叫した。あまりにも無感情な瞳のまま、ジャックは男の心臓をナイフで抉り出した。

痛みよりも、その呆気<sup>あつけ</sup>なさが信じられない。まるで花を摘み取るような、蟻を踏み潰すような何でもなさ。

ジャックが男の心臓を嚙<sup>えん</sup>下する。それを見ながら、男は己の人生<sup>が</sup>がこうも容易く失われたことに絶望を抱いて悶死した。

「ねえ、おかあさん<sup>マスタ</sup>。これからどうするの？」

「さっきの男の人が、お友達<sup>りくどう</sup>のいる場所を教えてください？ そこに行きましょう」

「いっぱい食べられる？」

「いっぱい食べられると思うわ」

よしよし、と女——六導玲霞<sup>りくどうれいか</sup>は無邪気に喜ぶジャックの頭を撫<sup>な</sup>でる。眼を細めてジャックはそれを受け入れた。そこには先ほど一人を解体し、一人の心臓を抉り出した怪物の面影は皆無だ。

「それじゃあ、行きましょうか」

「ん。バイバイ」

二人の屍体に向けて、ジャックは軽く手を振った。翌日になってその屍体が発見され、更に彼らの仲間もまた、たまり場であったバーで皆殺しにされていたことが発覚した。マフィア同士の抗争かと警察は睨<sup>にら</sup>んでいたが、一つだけ不思議なことがあった。十五人の屍体は、一人残らず心臓が抉り出されていた。

嗅ぎつけた新聞は『切り裂きジャックの再来か!?』と面白可笑しく記事を書き立てた。  
しかし遡ること数日前、日本でもこれと極めて類似した事件が起きたということは、警察  
もメディアも勘付いていなかった。